～願望屋～

蓮宮　志奈多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～願望屋～

【Ｎコード】
Ｎ４４６０Ｃ

【作者名】
蓮宮　志奈多

【あらすじ】
ただ、虚しかった――――虐められているわけじゃない。友達がいないわけじゃない。別に親が怖いわけでもないし、冷たいわけでもない。お金が無いわけでもない。必要最低限度に欲しいものは全て揃ってる。成績もある程度取れてる。何故、こんなに虚しいのだろうか？そのことを確かめるべく、ぼくは、願望屋に“願望”を見つけてくれるよう依頼した。

＊プロローグ　～貴方の望みは何ですか？～（前書き）

～願望屋～
彼の元には日々、色々な人からの依頼が舞い込む。
それは失踪事件の捜索だったり、事件の助言だったり、不良の更正だったり、家事の手伝いだったりいろいろだけど、時々厄介な依頼が舞い込むこともある。
これは、現在、願望屋助手であるぼくがここを訪れるきっかけとなった出来事である――――。

＊プロローグ　～貴方の望みは何ですか？～

タスケテ――
え？

『貴方の望み。叶えて差し上げます』
そのキャッチコピーにつられ、ぼくは家から数キロ離れたこの町にやってきた。
それで、今その“願望屋”という店の前で突っ立っている。
見上げて否、見て一言突っ込みたくなった。
『ここが、願望屋？』
確かに、“望みを叶える”などといった神秘的なビジネスにはこのようなレトロな外観があっているのかもしれないが、現在の日本にこのような建物が残っているという事実に驚きを隠せなかった。
“本当に望みを叶えてくれるのだろうか？”
今更ながら不安になる。“願望屋”と銘打った胡散臭い詐欺紛いの商売じゃないだろうか？金を沢山ふんだくられて挙句の果てに望みは叶えてくれないなんて展開にはならないだろうか？
『まさかな・・・・』
首を振って否定してみる。けれど、不安はおさまらなかった。
『でも、ぼくにはもう――――ここしか残されていないんだ。』
ぼくは決心して扉をノックした。

『いらっしゃいませ！お客様。』
『！！！』
驚くことに目の前に飛び込んできたのは大量の薬の数々。ぼくは、一歩外に出て看板を探した。
『藤沢・・・薬局？』
『そうでございます。お客様』その女性の店員はにこやかにぼくに

笑いかけた。
『！！！』ぼくはまた言葉にならない言葉を発した。『じゃッッぁ、願望屋はここではないんですか？』
『あぁ、そちらのほうのお客様でしたか。どうぞ、こちらへ・・・・』
案内された部屋は古風で薄汚い外観とは裏腹にとても綺麗だった。壁にこれでもかと敷き詰められた巨大な家具の数々。左側一面に広がる巨大な本棚には、見たことも無いような大量の本や、少し不気味な骨董品（アンティーク）が飾られている。まるで、ファンタジー（例えていうなら、そうファンタージェン！）の中に迷いこんだような錯覚がぼくに起こった。
『不思議かい？』その店員は僕の心を見透かしたように言った。『ここにある本の中にはね。世界中に数冊しかない本とかもあるんだ。』
『え？！』
『例えば、販売を規制、禁止された本とか、あまりに危険なので本にさえならなかった本とか。』
『何でそんな本を持ってるんです？』
『集めるのが趣味だからだよ。』店員はまた、シニカルに笑った。
『ところで、自己紹介はまだだったね。ぼくの名前は藤沢　秋。因みによく間違えられるけど、性別は♂ね。』
女の子じゃなかったのか。ぼくは少し驚いたが、あえて突っ込まなかった。
『えっと・・・・新堂　夾です。宜しくお願いします』
『夾くんね。今日はぼくに何をお願いしに来たのかな！？』
ぼくは答えようとしたが、止めた。
その前にここが本当に“何でも叶えてくれる願望屋”であるのか？確認したかったからだ。
『あの・・・・』ぼくは遠慮気味に口を開いた。『このお店に行けば“願い事を何でも叶えてくれる”って訊いたんですが。本当です

か？』
『本当に決まってるじゃん？』彼は首を傾げた。『それとも――――人の望みを何でも叶えるなんて、君は無理だと思っているのかな？』
正直、吃驚してしまった。話していないのに、知られてしまっている。そう、真っ裸にされている気分に近い。しかも、まったくと言っていいほど恐れを感じさせず、真っ裸と言っても産まれたばかりの赤ん坊が親にその裸体をさらすような感覚。
『いえ・・・ただ・・・・。』
『まぁいいさ。最初はみんなそうだしね。信じられないようだから夾くんは後払いでいいよ。でも、願いが叶ったらちゃんと払ってね。』
『――――わかりました。』
信用はできない。
でも、願いが叶った後の後払いでいいって言ってるし、ぼくにはこの“願望屋”にすがるしかもう道は残されていなかった。

＊

『なるほど・・・・・・』願望屋はうんうんと頷いた。『その話から察するに、君の――――夾くんの“願望”は、ガンボウを見つけることかな！？』
そうです、とぼくは頷いた。
『そっか。なら簡単だよ。』
『本当ですか？』ぼくは、疑わしい眼で彼を見た。
いままで、何店も病院や店を回ったが、治すことが不可能だったぼくのこの心の虚構を虚無を、彼は簡単に治してくれるというのか？
『本当はこんな心理学者紛いなモノは嫌いなんだけどね。明日、学校終わったらまたきなよ』
『わかりました』ぼくはそう答えると、回れ右をしてドアノブに手を触れた。そして、不意に後ろに振り向くと続けた。
『今日はありがとうございました』
帰宅後、ぼくはベットに寝転がると、『人生は夢である。死がそれ

を覚まさせてくれる。』と呟き、深い眠りについた。

＊プロローグ　～貴方の望みは何ですか？～（後書き）

この話はぼくの友人のある女の子が書いた願望屋～人魚姫の歌声～の前作として製作した話です、どうぞ宜しくお願いします。
もしよければ、評価していただけると幸いです

＊～ぼく～　自問自答

ガンボウ――――
誰にでもある欲。
その根底にあるものは
幸せだったり、嫉妬だったり、驚きだったり、
悪意だったり、策略だったり、陰謀だったりする
ぼくのガンボウは何なのだろう？
ガンボウを見つけるために、願望屋に委託する。
なんとも皮肉な話――――
ぼくは夢を見ていた。

ぼくがいる場所はすごく暗い場所だった。
周りには誰もいなくて、ぼくは一人ぼっちで座っていた。
けれど、何も見えないわけじゃなくて微かな街灯の光に照らされ住宅街が見えた。
時折、目の前の十字路を車が通過し、ぼくをヘッドライトで照らした。
『誰・・・？』
人影を見かけてぼくは訊ねた。
『誰でしょうか？』
彼もぼくに問い返した。
『ぼく・・・・？』
『ぼくでしょうか？』彼はそう答え、『僕――――君だよ』と言った。
『じゃぁきみはぼく？』
『ううん。君は僕であって、僕は君じゃない――――』
彼はその後、何か言葉を繋いだようだったけどぼくには彼の声は聞こえなかった。

ぼくは夢から目覚めた。
ガバッ――――
『ハァハァ』
自分の荒い吐息が聞こえる。うなじから大量の汗が噴出し、背骨を辿っていた。服は背中にべっとりと張り付き下着も汗でぐしょぐしょにぬれていた。
ぼくは溜息をつくと、ベットから這い降り落ちていた服を手にとって、風呂場へ向かった。
そして、軽くシャワーの蛇口を捻った。
『・・・・・』
ふと、手が目に留まった。無数の切り傷が痛々しく刻まれている。未だに瘡蓋が取れてない生々しい傷跡は一昨日きったものだ。
ぼくはカウンターに手をやり、ナイフを手に取った。
ううん。ダメだ。ぼくは首を振ると、またナイフをカウンターに戻す。
どうしてこんなにも悲しいのだろう？
どうしてこんなにも虚しいのだろう？
ぼくは誰なのだろう？何故いるのだろう？いることに意味はあるのだろうか？
涙が目から溢れ出た。
わけがわからなかった。
幼稚園児でも答えられそうな単純な疑問。その答えが得れなくて今ぼくはもがき苦しんでいる

何故だ？

ぼくは、蛇口を再び捻ると風呂を出た。

虐められているわけじゃない。
友達がいないわけじゃない。

別に親が怖いわけでもないし、冷たいわけでもない。
お金が無いわけでもない。
必要最低限度に欲しいものは全て揃ってる。
成績もある程度取れてる。

何故だ？

風呂から出た俺は再び自問してみる。
幾度も問うてみたけれど、答えは――――帰ってこない。
居場所の無い、この孤独。
ただ、虚しかった。
『夾くん！！！』
外で俺を呼ぶ声が聞こえた――――
仕方なくぼくは皺皺のシャツに袖を通し、手元に置いてあるバックを取り上げると玄関から飛び出した。

＊～ぼく～　自問自答（後書き）

ふと書いてみたけれど、もしかしたら、迷走するかもしれません。
そのときは、皆さん気長に待っていてくださいね

＊第一話　日常

南野郡砂嘴川市に属する第二中学校は砂嘴川市の北部（主に堀の川地区と新北野地区、あと、ぼくの住む北野地区）の子供たちが通う結構なの知れた学校である。首都圏に通ずる“砂嘴川駅”に新北野地区が接してるせいもあってか、大半の家庭の親達は都心で働いているのでちゃんとした親も多く、学力は上々、これといった問題も少なかった。また、過去に数回“虐めや窃盗、横暴のない模範的な学校”としてメディアにも取り上げられていたそうだ。

ぼくたちはいま、その模範的な“砂嘴川第二中学校”の屋上に身を置き、二中の定番の昼飯である海苔弁を口に運んでいた。

『お前はさ、進学っていうの？、高校とかそうゆうの心配しないでいいから羨ましいよな。俺なんて部活一筋だったからさ、入れる高校が無くてよ。』

ぼくの唯一無二の親友、門梨桃太は独り言のように呟いた。

『そういわれるほど頭はよくないよ。』ぼくは答えた。『幾ら勉強したって中堅レベルの高校がせいぜいだし。』

事実。帰宅部という称号を持ちながらぼくはそんなに頭がよくなかったし、部活をしていないというのも、スポーツをやる行為自体が煩わしかっただけで別段学業に勤しんでいたわけではなかった。

『謙遜するなよな』彼は不貞腐れたように口を尖がらせた。『よく言うぜ。自分が馬鹿だとかよ。俺の二倍は点数取ってるくせに』

『でも――――俺はお前みたいに足は速くないし、力も強くない』

『ばぁか。世の中に出たら“君は何処の大学でたの？”とかが全てだぜ。社会人は足がいくら六秒台だろうが五秒台だろうが関係ないんだよ。野球だってそうさ。甲子園に出て、尚且つ決勝ぐらいまで勝ち進まないと、メディアは注目してくれないし、たとえセ・パのプロリーグには入れたとしても一軍にレギュラー張れるようになるのは夢のまた夢さ。』

確かに――――現実はそうだ。いくら、学校や市、地区や県で一番でも全国や世界で通用しなければスポーツ界でプロになるなんて不可能だ。でも、熱中できるものがあると言うのはそれだけで一つの財産であり、どこそこの大学でた。とかいう実績よりもおそらく部活に勤しみ“青春時代”を過ごしたという方が大事だと思う。いくらたくさん勉強して医学部や法学部に入ったとしても“青春時代”の何かを見失っていたらそのヒトの人生は無意味だとぼくは思うし、沢山お金を儲けたって意味無いような気がした。
果たして“時は金なり”という諺はどっちの意味で使われる言葉なのだろう？
『それに――――だな。』彼は続けた。『甲子園にいくって言う夢も実力を知ると儚い夢だっ、てわかったからさ・・・・・。』
『でも、目標があるっていうのはいいことだと思うぜ。捨てるなよ。その夢』
そう。すくなくとも“目標”というモノがないぼくよりは。遥かに彼は“幸せ”なんだと思う。
そこまで話したところでぼくの海苔弁は殻になった。
五時間目を告げる予鈴がぼくを見てたように、鳴り響いた。

『起立、礼、着席』
規則正しい挨拶と共に生徒一同が先生に頭を下げる。生徒達の礼を前にして嫌われ者の先生、島崎将太ことロリ崎ロリ太は偉人らしくぼく達にもったいぶって礼をして、いかにもそれらしく教科書を読み始めた。
『え～、今日は旧約聖書Ｐ９８の旧約聖書・創世記――――アダムとイヴについての一説の解釈を学びたいと思いマス。え～、アダムとはヘブライ語で「土」「人間」の二つの・・・・・・』
ロリ崎は話し始めた。でも誰一人として授業を聞いてはいない。この学科の授業（我が、学校には中学には珍しく宗教の授業がある。本来我が家は“仏教”の一派であるし、日本は神道という宗教に当

たるのだから、それを学ぶべきなのだろうけれど、日本の文化によほど興味を持っているか、信者でもない限り（もしくは、思考が老いているか）大抵は“キリスト教”を選択する。それは、法事やお盆に比べ、昨今では復活祭やハロウィン、クリスマスなどのほうがぼくたち若者から見て身近にあるからで、たいした理由は無い。勿論ぼくもあまり宗教には興味が無かったけれど、皆が選択していると言う理由で“キリスト教”を専攻していた。）ではいつものことだった。皆授業を聞いているフリをしているだけで、否、皆唯席に座っているだけで、先生のほうも生徒を注意はしない。文部省が定めた無理のあるカリキュラムをそれらしく生徒に――淡々と――語っているだけだ。（そう、形容するならうん。馬の耳に念仏を唱えてる状態だ！）

『・・・・・いますが、『創世記』には何の果実であるかという記述はないんです。』

島崎がロリ崎と呼ばれ始めたのは昨年の秋からだった。去年から引き続きこの三年の宗教学科――――キリスト教――を担当している彼は二年生の夏ごろまでは生徒に慕われていたが、夏休みに、島崎が女子高生と援交しているのを偶然、二年生の女子生徒の集団が見てしまった為、一気に評判はがた落ちした。無論、最初の方は信じない生徒もいたが、秋ごろにはそれも風前の灯で開き直った島崎が女子生徒に色目を使ったため、最早島崎は完全に“変態”という地位に置かれてしまい、“ロリコン、島崎”というあだ名が定着した。もっとも先生とは元々あんまり仲の良くなかったぼくにとって例え彼が“島崎”であろうが“ロリ崎”であろうがかわりはなかったけれど。

とんとん・・・・

振り向くと後ろの席に座っている女の子がぼくに殺人的な笑顔を向けた。

『ん？』

『お願い。これエリちゃんに回して。』ぼくは彼女に小さく折りた

たんだメモ用紙を渡された。レッドカードで反則だと思ったが、幸いなことに彼女が回してくれと願う、“エリちゃん”は斜め前の席だったので快く承諾することにした。
『うん。』
退屈な時間はなかなか過ぎないものだと思ったがその偏見は間違っているようだ。アインシュタインに抗議しなければならない。時は驚くべき速さで過ぎてゆき、気付いたときには学校が終わっていた。

帰り道、ぼくは桃太に聞いてみた。
『なぁ、お前死にたいと思ったことってあるか？』
『え？あぁ・・・そういえばさ、夾。今日のロリ崎の授業いつもどおりみんあふざけてたな。』
『あぁ。』
『他の先生の授業ではあんなことは無いのに、どうしてあいつだけあぁなるんだろ？（笑）』彼ははぐらかす様に言葉を繋げた。『やっぱりアレしてたからなのかな』
『そうだろ？』勿論こんなことの答えは決まっている。ぼくが聞きたいのはこの問いじゃない。とは思いながらも桃太の付加疑問文にぼくは相槌を打った。
『俺は別にあいつのこと好きじゃなかったけど、あそこまでくると可哀想かな～』
『そうか？』ぼくは笑った。『援交するのが悪いんじゃねぇか』
『全く（笑）夾くんは冷たいね。ぼくのほら――――この前の試合にもきてくれなかったし。』
何故、ここまではぐらかすのだろう？
嫌なのだろうか？この話題に触れるのが。
『おいおい。一昨年の話だぜ。しかもあれはいっぱい謝ったじゃねぇか。』
談笑はぼくらが分かれるまで続き、
結局桃太は最後までこの問いに答えなかった――――。

＊第一話　日常（後書き）

この、題名の意味は一番最後になってわかると思います。それと、本当は、“＊第一話　永久に響く大切な何か。”がこの話のサブタイトルでしたが、急遽変更いたしました・・・・

＊第二話　平凡からの脱出法

ぼくが再び願望屋を訪れたのはそれから六日後のことだった。
前来た時よりは緊張しなかったが、それでも願望屋の前で数歩踏みとどまり、数分の間願望屋と隣に聳える大きな医療施設の間を行ったりきたりしていた。暫くして、ぼくは決心し中に入るとまるでぼくを待っていたかのように、願望屋の主人藤沢秋が姿を見せた。
『お、この前きた疑り深いヒトじゃないか？どうしたんだい？』
願望屋の主人は驚きもせず、まるでまえまえから友達だったようにぼくに訊ねた。
『ぼくの記憶が正しければ願望屋さんが明日の放課後来いと仰ったはずですが？』
『あぁ、そうだってね。』秋は悪びれる様子も無く続けた。『ごめんよ。まぁ、奥に入ってくれよ。』
彼は奥の部屋に入ると一番豪華そうな椅子に座った。そして、『何してるの？』と訊ねるような眼をすると、足元から赤いファイルを取り出した。
ぼくは、彼の目の前の椅子に座った。
『あの・・・・』
ぼくは口を開こうとしたが、彼に遮られた。
『礼儀がなってない』
『え？』ぼくは耳を疑った。
『礼儀がなってないね～。ぼ―や。何も言わずに席に着くとは。礼儀作法は家で習わなかったのかい？』
『あの、願望屋さんは何歳でしょうか？』どう見ても―――多少誇張したとしてもぼくのほうが多少年下なだけだろう。ぼ―や、と呼ばれるのは心外だ。
『何歳だと思う？』彼はシニカルに微笑んだ。
『さぁ。』

『還暦――――』
『え？』
聞き間違いかな。って思ってぼくは聞き返した。
『嘘。』なんともシリアスな顔でこの人は冗談をいうらしい。ぼくの頭の中にある危険センサー部位の要注意事項に書き加えられた。
『でもぼくが何歳かは夾くんが知る必要は無いよね。この場合、重要じゃないし。君はそんなこと聞きに来たわけじゃないでしょ？』
上手いこと流された気がしたが、確かにそうなのでぼくは改めて、願望屋と向き合った。
『なんだっけ？君の依頼。あ～、そうだ。ガンボウを見つけることだったね。願望を叶えてくれって客は五万といるけれど、無気力。無関心の自分をどうにかして欲しいって客は初めてだよ。』
『そんなんじゃ・・・・』
ぼくは否定しようと思った。無気力で無関心を治して欲しいわけじゃない。
『あっ、いや違ったね。』彼は面倒くさそうに言い直した。『何もかも平凡すぎて、突出していることも無ければ劣っているところも無い。誰にも必要とされてないような気もする。そんな自分に生きる理由――――を見つけさせてだっけ？心の虚無を生めて欲しいっと。疑心暗鬼も甚だしい、独り善がり、贅沢だ。本来なら自分で解決しなきゃいけない悩みごとだしねぇ』
ぼくは腹が立ってきてやっぱり断ろうかと思ったが彼にまた遮られた。
『まぁ、待ちなよ。ぼくだって久しぶりに請けた仕事なんだ。君は大切なお客さんなんだ。望みは叶えてあげないとね。』彼は続けた。
『まぁ、いいや。この計画――願望達成までの道筋を君に説いとこうか。』
願望屋がいうには、どうやらぼくにガンボウを備え付けるには、心の虚無を埋めるには、然り平凡から抜け出すには“好きなこと”を

発見する（つまり、熱中することを見つける）か“平凡”ではなくなるのが一番らしい（つまりは非凡、悪く言えば変なやつ）。欲を言わなければ友達捨てて、現在まで確立してきた地位も捨てて、ひたすら黙るか喧嘩ぶっかけるか皆の前で露出するか、何かしらのセクハラ行為を女子にするかすればもうそれだけで非凡（即ち、変態――変な奴）であるから、ぼくの望む平凡脱却になるのだけれど、それはぼくが却下した。だから、方法は自ずと一つに決まってくる。“熱中すること”を見つけて、詰まらない生活から脱却し、心の虚無を埋める、だ。でも、ぼくには“好きなこと”があった経験が過去に無かった。

何かしててもすぐ飽きる。必ず三日坊主。スポーツは全部平均並みにできるだけで魅力を感じられない。これではあまりにも可笑しいと中一の頃思い数あるスポーツを試してみたが全部試みる前に止めてしまった覚えがあった。

そのことを願望屋に話すと彼は、『我侭だな。まぁ、願望屋なんかに願望を叶えて欲しいなんて強請りに来る奴は大抵我侭かぼくを便利屋だと思っているからいいんだけどさ。』と呟いた。

恐らく、あと一二回ここにくれば願望屋に対する興味も失せるような気がする。

そんな、気がした。

『じゃぁ、好きなことを作ろうか。夾くん！！』

彼は元気よく言うと部屋の奥のほうから埃塗れの古びた水晶球を取り出した。まさか、ぼくは紛い物の――決して信じてはいけない、占い師。いや宗教法人に捕まったんのではないかと刹那、危惧した。しかし、彼はぼくの心を見透かしたように微笑し、

『大丈夫だよ。占いはできるけどするわけじゃない。』と言って、水晶球を元に戻した。と、同時に他の物を腕の中に滑り込ませたようだったが見えなかった。

『そういえばさ。君のことについてあんまりぼくは知らないね。』

彼はぼくの前の椅子に再びどかっと座り偉そうな格好をしながら訊

ねた。まるでロリ崎みたいだ。とぼくは心の中で呟いた。が、彼が再び微笑したところを見るとまた見透かされたようだ。ぼく脳内にある彼の要注意事項には無意識のうちに“読唇術”又は“読心術”の気配あり。という記述が加えられたようだった。

『願望屋さんなら言わずともわかるんじゃないんですか？』とぼくは訊ねた。

『いや、わからないよ。』

『え？何故です？』

『唇の動きを見たり、仕草を見たりして読唇や読心する心得はあるけど相手の心の中の扉を開錠する術は生憎のところ持ってないからね。』驚いたことに彼は読唇や読心する心得があることを否定しなかった。『まぁ、考えてくれればわかると思うけどね。流石に考えてもいない深層心理を理解するのはぼくにはできないよ。』

ぼくは馬鹿にされたような気がしたが、納得し、話そうとしたが最初何を答えていいのかわからずたじろいてしまい、また訊ねた。

『えっと、何から？』

『全く。本当に飲み込みが遅いなぁ。入学式や始業式のあと一度や二度は学校で自己紹介しただろ？アレでいいんだよ。』

『わかりました。でも――』

『はい。でもじゃない。始めて。』

ぼくは渋々承諾し、自己紹介を始めた

＊第二話　平凡からの脱出法（後書き）

本当はこの話のサブタイトルは、＊第二話　還暦でしたが、不可解だったので変更してみました。
あと、サブタイトルは、いいのが見つかり次第変更するかもしれません

＊第三話　願望ファイル

藤沢秋はファイルを再び開いた――――。

【願望書　Ｎｏ．０００００９１

一．依頼内容　何もかも平凡すぎて、突出していることも無ければ劣っているところも無い。誰にも必要とされてないような気もする。そんな自分に生きる理由を見つけさせて欲しい。

二．理由　恐らく、思春期による思い違いや、受験のストレスによるもの

三．名前　新堂　夾

四．概要　中三・♂

五．住所　南野郡砂嘴川（さしかわ）市北野地区四丁目八番地ルネサンス砂嘴川八〇五号室

六．趣味　特になし

七．好きなもの　特になし

八．嫌いなもの　特になし

九．一番好きな本　リアル鬼ごっこ

十．成績　体育が４で音楽が２．その他は全て３。前回行われた実力テストは中の中。

十一．性格　悪くない。

十二．例えた動物　うさぎ

十三．考えられる対処法　平凡から脱出させ、心の虚無を埋める。又は好きなこと（熱中すること）を見つけさせる。思春期だということを伝える

十四．処方箋　好きなことを見つけさせ、心の虚無を埋める。

十五．予想される願望達成率　１００％

十六．備考　父親は仲原大学出身で春無（はるなし）物産に勤務していたが、バブル崩壊の煽りからリストラ。新堂夾が六歳の頃、自殺。母の紀美子は、薬剤師で現在、砂嘴薬局に勤務。妹の美菜は砂嘴第三小学校

四年。
十八．彼の全体の印象　イキルシカバネ。いいかえれば人形使い（ダラン）に操られた糸繰り人形（マリオネット）。人形師に作られた自動人形（オートマータ）。喜怒哀楽の感情が欠落し、生きることに無気力で、無関心。】
成程。秋は頷き、ファイルを閉じた。
『この願望を叶えるには少し骨が折れるね。あいつにでも頼むか』

ぼくは、家にいた。
願望屋とわかれると又不意に不安がこみ上げてきて、腕を切りたくなった。ぼくは眼を閉じて我慢し、暫くして落ち着くと一目散に家へ向かって走った。
『何が原因なんだろう？』
病院に行ったとき、ぼくは『わかりませんね。』と精神科の先生に言われた。脳波は異常が無かったし、原因となる何かしらの出来事も見当たらなかったからだ。だから、精神科の先生は『きっと、受験のストレスか思春期によくある疑心暗鬼の症状でしょう。もしかしたら無意識のうちの恋患いかもしれませんね。いずれにせよ思春期は誰でも悩む時期です。』
そんなんじゃない。そんな簡単に片付けられてたまるものか。と、ぼくは反論したが、精神科の先生は、『思春期の子供は皆同じようなことを言うんだよ。』と嘲笑された。
『どうします？念の為、精神安定剤を処方しましょうか？』
先生は僕の親に言ったが、親は、結構です。と断り、ぼくは精神科を後にした。

あの先生の言う通りなのだろうか？

ぼくは自問自答してみた。“何かが違う。”少なくとも、受験のストレスや思春期の思い違いなのだったら、絶対わかるとぼくは自負

している。
そんな簡単に片付けられないような気がする。
ぼくは、いつの間にか深い眠りについていた。

またあの夢だった。
ぼくは十字路に一人ぼって座っていて、また車のヘッドライトがぼくを照らした。
『誰・・・？』
人影を見かけてぼくはまた訊ねた。
『誰でしょうか？』
彼もぼくにまた同じ言葉で問い返した。
『ぼく・・・・？』
『ぼくでしょうか？』彼はそう答え、『君だよ』と言った。
『じゃぁ君はぼく？』
『ううん。君はぼくであって、ぼくは君じゃない、ぼくは――――』
風が吹き、声が聞こえなくなった。『だから。ずぅと君を待ってるんだよ。』
え？彼は今なんと言っただろうか？大事なことを言っていたような気がする。
また風が吹き、彼の顔が揺れて消えた。夢が変わった。
砂嵐が目の前に降り注ぎ青と黒の線が横に走った。
『・・・・・・』
砂嵐の奥で白い文字が見えた――――。
文字が消えた後、遠くのほうでヒトが見えたがそれは誰だかわからなかった。

＊第三話　願望ファイル（後書き）

本来の題名。。。＊第三話　白でした

それと、機種依存文字になってしまったので、訂正しました

＊第四話　真衣

秋は悩んでいた。
あいつに、相談すべきかどうか。
あいつを彼の元に派遣すべきかどうか。
彼の精神を壊してしまうのではないか。
彼の世界を変えてしまうのではないか。
いや、いいのかもしれない。
ふと、自分の奥底にある破壊願望が剥き出しになったことに気付いた。
彼が壊れたところを見てみたいような気がした――。
秋は電話帳に手を伸ばす。そして、受話器を握ると規則正しくゆっくりと番号をプッシュした。

翌日。
学校に着くと、騒がしい声が聞こえた。
どうやら、クラス一五月蝿い少女と名高い“真倉”と、クラス一のヤンチャ坊主“麻呂”らが話してるようだった。ぼくは、“野次馬”のような顔をして麻呂の後ろからその集団を覗いた。
『おお、夾か。今日転校生が来るらしいぜ』麻呂の隣にいた歩くレポーター。拡声器こと茂信が言った。続けて『しかもそいつ美少女らしいぜ。』と麻呂が付け加えた。
『マジ？』
とりあえず聞いてみたものの、転校生が来ようが来まいが自分とは無関係な気がしてそれ以上訊ねなかった。が、話すことを生きがいとしている彼はこっちの気など考えもしないで更に続けた。
『マジマジ。しかもそいつ俺等と同じ北四住民らしいぜ。』
北四とは北野四丁目のことである。

ぼくと同じ北四住民である桃太がおぉぉぉぉ、と歓声を上げた。
『でもさ。』目の前にいた真倉が疑わしそうな目つきでぼくの顔を覗いた。机の上に足を乗っけていて、見たくも無いパンツが見えそうだ。ぼくは思わず顔を背けた。『私は――――せんせに貧乏な女の子だって聞いたよ？』
『はぁ？』男たちがハモッた。『なわけネェじゃん。きっと清楚な顔立ちで髪型はツインテール。お嬢様みたいなヒトだよ。きっと』麻呂は何処かを見つめていた。
『馬鹿じゃん？今時ツインテールなんているわけないじゃん。漫画じゃあるまいし。』
麻呂はそれでも何か言いたそうだったがチャイムが鳴ったので、それ以上何も言わず席に着いた。

『起立、礼、着席』
いつも通りの挨拶。生徒一同は『おはようございます』と先生に頭を下げる。但し、今日はいつもより皆威勢がよいようだった。
転校生効果だろうか？
辺りを見回すと男の過半数の目が笑っていた。対する女はそうでもないようだったが、大半はどんな転校生が来るか楽しみにしているようだ。
『それでは――――えぇ～、皆さんももう知っているかもしれませんが、転校生を紹介します。転校生、入って。』
ガラッ

『かわいいいいいいい～』
女子たちや麻呂が叫びだした。過半数の男子生徒も彼女に釘付けになっていた。
『真衣です。宜しく』
背はそれほど高くない。顔は小柄で髪の毛は長めのストレート。あんまりわからないけれどスタイルはなかなかよい。あまり知らない

ぼくから見ても彼女は素直に可愛いと思った。
『じゃぁ、真衣君。壁際の麻呂君の後ろに座って。』
麻呂が待ってました。とばかりに手を上げた。ここです。真衣さん！という自己アピールのつもりだろう。が、彼女はぼくのほうへ向かってきた。
『？』
皆は首を傾げる。当然ぼくも首を傾げてしまった。しかし、彼女はぼくの前で止まると快活な笑みを浮かべた。
『貴方が夾くんね。宜しく。』
彼女がぼくに手を差し伸べた。ぼくは、どうも。と言って彼女の手を握った。
皆、目を丸くした。先生が手を叩き、授業を始めますよ。と言ったが誰も聞いてはいなかった。
ぼくは唖然として席に戻る彼女を見つめていた。

＊第四話　真衣　（後書き）

＊第四話　転校生でしたが、普通過ぎるので変えました

＊第五話　派遣者

授業は誰も聞いてはいなかった。
先生もわかってたらしく、普段は注意するのに今日は注意もしない。
いつの間にか終了のチャイムが鳴っていた。
先生は、『今日は礼しなくていいわ。あっ、あと―――真衣さんは放課後職員室まで着てね。』と言うと、そそくさと教室を出て行った。
途端、女子は真衣のもと、そして大半の男子はぼくのもとに集まった。（流石に、あの、塊の女の中に入っていく勇気のある奴はいなかった。それよりも、俺を咎めたかったって言うほうが当たってるかもしれないが）
『どういうことか説明してもらおうか？』茂信がぼくの前にずんっと立った。
『え？』
『とぼけるなよ。何で真衣ちゃんとお前が知り合いなんだよ』
『そんなの、知らないさ。』
ぼくは正直に答えた。周りの人間がぼくを囲った。
『嘘付け。じゃぁ、なんで真衣ちゃんはお前に挨拶したんだよ』
『知るかよ。』
ぼくは、女子たちの会話に耳を傾けた。茂信がまだなんか言ってたがぼくの耳にはもうその声は届いていなかった。
『ねぇねぇ。夾くんとさ。どんな関係なの？』野次馬根性丸出しで―――恐らく真倉が訊ねた。
『別に。何も無いよ。』
『嘘だぁ～。じゃぁ、何で挨拶したの？まさか一目ぼれとか？』
『別に。』声が弱くなった、気がした。
『じゃぁ、何で？』
『ううん。特に理由は無いよ。』

なら、何故だろうか？何故ぼくなんかに挨拶したのだろうか？
ぼくの性格は自意識過剰なわけではないけれど、何か期待してしまう自分がいた。
『おい！聞いてんのか？』
『ん？』
『聞いてないようだな。やっぱり、真衣ちゃんお前の幼馴染とか？』
『は？』
延々とぼくは拷問にかけられた。授業の時間までも隣の席の女の子に毎時間問い詰められ、気付いたら昼休みになっていた。ぼくは、桃太を誘って屋上に行こうとしたが、真衣に呼び止められた。
『ねぇ、一緒に食べない？』
ここで期待してしまうのは不可抗力というものだろう。ぼくは承諾し一緒に屋上に向かった。後ろには何故か麻呂と桃太。そして、数々の殺意の混じった視線を感じた。

『あの・・・ご一緒させてもらってもよろしいでしょうか？』
桃太と、麻呂が猫なで声で訊ねた。
『え？』真衣は一瞬嫌そうな顔をしたが、何を思ったかニコッと笑うと『いいよ。』と言った。
『ありがとうございます。』二人はそそくさと彼女の隣に座った。
『あっ、でも――――』彼女は小悪魔っぽく笑うと言った。『その代わり売店で焼き蕎麦パン二つ買ってきて。』
『二つ？』
『そ、私と夾くんのぶん』
二人のギロッとした視線を感じた。ぼくは、『一つでいいですよ。真衣さん。ぼく要りませんので。』と言った。
『そぉ？じゃぁ、一つでいいや。』
また、ギロッとぼくへ殺意の混じった視線を感じた。しかし、彼女が、『ほら、行ってくる。』と言うと二人は犬のように下の階へ降りていった。

焼き蕎麦パンはもう無いだろうと、思いながらぼくは思わず彼らの行動に苦笑してしまった。
『で、貴方は誰なんです？』ぼくは近くに誰もいないことを確認すると彼女に訊ねた。『まさか、ぼくに一目惚れしたわけじゃァ無いでしょう？』
『あら、私は貴方に一目惚れしたのよ。』
『！？』
『嘘。』
この前も同じやり方で騙された気がした。いったいぼくの思考回路には欠陥がいくつあるのだろうか？
『依頼人（クライエント）と心理療法カウンセラー（セラピスト）』
え？彼女はなんと言っただろうか？
『私がセラピストで君が来談者───依頼人であるクライエント。ここまで言えばもうわかるでしょう？私は、“願望屋”藤沢秋から派遣されたセラピスト“七瀬真衣”それでは改めて宜しくね。クライエント。』
彼女はニッコリ笑いぼくの前に跪くフリをした。
そういうことだったのか。自分が何故か気恥ずかしく感じられた。
『宜しくお願いします。』
『因みに年は二十歳。まだ新人さんなんだ。でも、中学生でもいけるでしょ？ほら、君も見惚れてたし。』
小悪魔的な微笑。風に煽られスカートが舞った。またぼくは騙されたような気がした───。
でもこのヒトになら───また、騙されてもいいような気がした．
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
夢見心地。
はて。どんな気分であろう？

ぼくにとって夢とは悲しく寂しい孤独なもの以外何物でもなかった。
しかし、世間から見ればこの状態はそういうことらしかった。
『真衣さん。焼き蕎麦パンです。』
昼食を食べ終わった頃、丁度屋上に桃太たちが駆け出してきた。手には焼き蕎麦パンを握り締めていて息は荒々しかった。しかし、丁度その頃ぼくと真衣さんは願望屋、藤沢秋について身振り手振りを交えて話している最中で、彼らにとってぼくたちは恋人同志に見えたらしかった。
最初に麻呂が口を開いた。
『てめ。真衣さんといちゃいちゃしてるんじゃネェよ。』
『は？』
ぼくの隣で真衣さんはニコニコ笑っていた。
『とぼけるんじゃねぇよ。』桃太はそれに付け加えた。
『何を？』
『とにかく、真衣さんに近づくな。』
『？、理論的に言えよ。何故ぼく真衣さんに近づいちゃいけないか』
『お前、真衣さんと付き合ってるのか？』
『いや。』ぼくは即座に否定した。『別に。』
『じゃぁ、いいじゃねぇか。』
『ぼくの自由を束縛する権利は君には無いはずだが？』
クラスの一番―――力が強い奴がもっている、言葉には表されない暗黙の権利。彼らは歯向かうものには容赦なく従僕を送り出し、時には自分の力で持って制裁する。
普段のぼくには全く、無関係な世界―――。
でも、今彼は拳を振り上げ、僕を殴ろうとしている。
真衣さんが口を開いた。『どっちでもいいけどさ。来談者の夾君を脅したりして私と会えないようにしたら、許さないよ？』
『・・・・。』ぼくの頭上で振り上げた拳は止まった。『・・・わかったよ』
麻呂はぼくを睨みつけると下に降りていった。

そこには、ぼくと桃太と、真衣さんだけが残された。
僕は真衣さんに訊ねた。『あの、真衣さん？なんと呼んだらいいんですか？ぼくは。』
セラピスト。いや、先生だろうか？
『普通に――――。真衣でいいよ。あっ、堅苦しい敬称つけないでね。』
『え？』
『センセ。とか無しだよ？』
彼女はぼくにウインクした。ともあれ、年上の女のヒトを呼び捨てにするのは呼びづらそうだ。桃太はぼくを羨ましそうに見ていた。
帰り道。ぼくは真衣さんに誘われたが、断って桃太と帰ることにした。麻呂は良いとして、流石に桃太には誤解を解いて欲しかったからだ。最初、誘ったときは断られたが、帰りも後ろについていったら突然桃太が口を開いた。
『お前さ。ぶっちゃけ、真衣さんとどういう関係なの？』
『先生と、来談者。』
『病院みたいだな。でも、それってお前が従僕ってこと？』桃太はこっちを見ようとはしなかった。
『いや。』ぼくは口をつぐんだ。
『依頼人（クライエント）と依頼実行者、執行人』
果たして言っていいものかと躊躇う。言ったところで信用してくれるだろうか？
『いや？』桃太がそれに続く何かを求め、訊ねた。
『ぼくは彼女の依頼人（クライエント）なんだ。』
『クライエント？』
『そう。ぼくは彼女にあることを依頼している。それでいいかな？』
正確には。願望屋藤沢秋にぼくが依頼し、彼女――いや彼が“七瀬

真衣”心理療法カウンセラ―に依頼した。でも、ぼくが真衣さんに依頼したというのは間違ってはいない。でも、そこまで話す気には――自分の弱みを晒してしまうようで――なれなかった。
『なんの依頼だい？』
最もな質問。どう誤魔化そうか？“教えない”。うん。その一言でもいい。でも、彼女は納得してくれるだろうか？
『いえない。』とりあえず、ぼくはそう答えた。
『なんで？』
『とても、恥かしいことだから。』
間違ってはいないハズだ。決して。
『まさか、もてないからって彼女になって欲しいと言う依頼？』
『違う。』
『じゃぁ、何かの風邪？』桃太はクスッと笑い、『そんなわけないよな。中学生だもん。真衣さんは。』と独り言のように付け足した。
『・・・・』
『じゃぁ、彼女が君を追いかけてきたとか？まぁいいや。ぼくには関係ないことだし』
納得してくれたかわからなかったが、とにかく、桃太あそれ以上突っ込まなかった。
結局、彼はぼくの方を分かれるまで、一度も見なかった。

＊第五話　派遣者（後書き）

少し長いと思います。
最初、この題名はセラピストでしたが、急遽変更しました

＊第六話　ナイフ

午前、九時五十七分“砂嘴川駅”――――北口ロ―タリ―、大時計台前
昨日の夜、ぼくは真衣さんに携帯で呼び出しを受けここにいる。この約束の為に、今日は朝から友達に連絡し全ての予定をキャンセルした。

『遅い・・・・』

せっかちなぼくは、十分以上遅れるとイライラしてくる。昨日、真衣さんはなんと言ってきただろうか？一応、もう一度メ―ルを読み直してみた。『九時四十分に砂嘴川の北口、時計台前に集合ね。拒否権は無いから。お金だけ持ってきてね。＾＾』

『やっぱり、九時四十分だよな？』

ぼくは、辺りを見回してみた。
知らないヒトが沢山あるいていた。
殆どが二人組のカップルで、自分だけ取り残されたような気がする。
孤独。世間がぼくを嘲笑っているようで、ぼくを虐げているようで視線が全て自分に注がれているようで、ぼくは思わず眼を閉じた。
辺りが真っ暗になった。
不意に叫び声を上げそうになってしゃがみ込む。耳を塞いだ。
呼吸が荒くなった。
ポケットを弄る。ナイフを掴み、必死に落ち着こうとした。

『タスケテタスケテタスケテ』

手が汗ばみ、眼の奥で大量の水が見えた。

もう一度、ナイフをぎゅっと握り締め、落ち着こうとした。
（おちつけ。ぼく・・・・）
心の中でゆっくりと、唱える。ナイフをギュッと握り締めたから手がますます汗ばんだ。

（落ち着け。落ち着くんだ。もう・・・あいつは・・・）
また、叫びだしそうになったとき、誰かに背中を叩かれた。
あまりに吃驚してぼくは思わず叫び声（悲鳴を）上げそうになったがその人はぼくの口を塞ぎ、ぼくを抱き寄せた。
『大丈夫？夾くん？』
見上げた場所にいたのは真衣さんだった――――。

『遅いですよ。真衣さん。』ぼくはゼェゼェ声で呟いた。
『仕方ないじゃん。いろいろあったんだから。』真衣さんはニコッと笑う。風に煽られて短いスカートが舞った。『それより、夾くん以外と重症みたいね。』
『ええ。』吐き気を抑え、掠れた声で呟く。『でも、いつものことですから。今日は真衣さんがいてくれて助かりました』
そう。いつものことだ。大抵予測できない状況に一人で置かれると叫びだしてしまい、その場に倒れこむ。一番酷かったのは去年の秋、この場所で倒れて救急車が駆けつけて十日間ぐらい入院した。そのときは流石に皆に怪しまれ精密検査を受けたが、適当に言い訳して回避した覚えがある。そのときにナイフも没収され、今もっているのは二代目だった。
『いつも？じゃぁ、一人でいるときはどうするの？』真衣さんが訊ねた。
『計画通り予定が進めば大丈夫なんです。だから――――』
『だから？』
『・・・友達と遊ぶときは十分から二十分の誤差があるものとして行動します。それ以上こない場合大抵家に帰っちゃうんです。』
『じゃぁ、今日は私が約束の時間に遅れたのが悪いわけ？』
『そうなりますね。』
『ごめんね。』そして、ぼくに聞こえないように呟いた。『こりゃぁ、願望（あいつ）屋が思っている以上に厄介なクライエントだね・・・』
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

神楽坂ショッピングモールは、早くも二十一世紀代最大と呼び名の高い超大ショッピングモールだときいたことがある。その敷地面積は裕に73ヘクタールを超え、“ネット時代”と呼ばれるこれからの世界に希望の兆しを灯したとか世界中にその名を轟かしたとかいわれているそうだ。（ぼくは、この手の話には疎いので確かかどうかは知らないが）その客の動員数は一日のべ約5万人。休日になると少なくとも3倍から15倍、夏休みなどはそれの更に2倍から3倍の客足を動員し、日本の経済を潤す。

ぼくたちは、日本の経済を潤すべく（表現が間違ってるかもしれないが）そのショッピングモールに出向いた。

『やけに人数が多いね・・・・』真衣さんが呟いた。

このヒトは田舎の人だろうか？神楽坂のこのショッピングモールがこれくらい混むのは当然のことで、今日は少ないぐらいな気がする。少なくとも、去年の開店一年目のGWの頃は、これの十倍ぐらい人がいて、イベントも何も無いのに、10M行動するのにかなりの時間を要したものだ。そえれが何分だとはあえて触れないが。

『真衣さんは何処に住んでるんです？』

『ん？私の私生活が気になる？』真衣さんは微笑を浮かべた。『秘密だよ♪あっ、それと私のことは真衣って呼んでね』

『え～教えてくださいよ』

こんな他愛の無い会話をしながらぼくらは進む。途中、同じクラスのヤンチャ娘、“大友、小手川、簗瀬（やなせ）”の三人を見かけたが、大勢の人ごみに紛れすぐに見えなくなった。

“月馬ヶ丘高級ショップ・神楽坂店”の看板の前で真衣さんは立ち止まった。

『ここで買い物するんですか？』ぼくは驚いて真衣さんを見上げた。彼女はシニカルにぼくに微笑を浮かべた。『そうよ。』

ぼくの手をとり、彼女は店の中へ入った。

＊第六話　ナイフ（後書き）

＊第六話　ナイフは、思いつかなかったのでとりあえずつけてみました。
でも意外とあっているような気もします。
お知らせ・この第六話の更新の再、第参話　願望ファイル第十八項目に（確かですが）些細な文を追加させていただきました。物語にはさして影響が無いかもしれませんが、念の為連絡しておきます。

＊第七話　恋心

“月馬ヶ丘高級ショップ――――”
昨今、若い子から人気上昇中の新感覚の店にして、デパートのように物は高くないけれどスーパーなんかよりずっといい品揃えであると評判の女性向けの店である。その客層は大半を女子中高生から大学生までのハイティーンが中心で、ランジェリーショップなどのように彼氏などじゃなければ男は近寄ることは無い店だ。お蔭でぼくたち男子生徒諸君、同世代の男性から見ればこの店は未知なる世界であり“彼女連れのみ入ることの許される”憧れであった。
少し前、麻呂たちがこの店について話しているのを聞いたことがあった。
真倉によると、この高級店には、女性を除き、女子に免疫のある男子諸君しか寄り付かないため中は無防備に女性用用具などが取り揃えてあると言う。何処を探したとしても、男性が使うような物は見つからないんだそうだ。
そんな店の中にぼくのような初心で女性にあまり免疫が無い男子が彼女のような可愛い女性を連れて入っていいのだろうか？
ぼくは、彼女に訊ねてみたが、彼女は『大丈夫♪大丈夫♪』としか答えてくれなかった。
中に入ると、彼女はまず真っ直ぐとメインストリートらしき道進んだ。そして、突き当りで右折（ざっと辺りを見回してきたところ、とった道は全て化粧品売り場になっていた。）すると、そのまま直進し、突き当たりのところでやっと立ち止まった。
看板を見ると“服売り場・・・！！！”と明記されている。
嫌な予感がした。
気付いたとき、ぼくの目の前の籠の中には大量の服が山済みにされ

ていた。
『これ、全部下さい♪』
『かしこまりました』
ぼくは絶句し、唖然と彼女を見つけた。ふと、一番上にあるシャツを手に取り値札を確認する。
５０００円――――。いくらここが安くともこれだけあれば軽く十万は超えるような気がした。
しかし、彼女は普通にキャッシュでそれを支払い、ぼくに荷物を全て持たせ、その店を出て行った。ぼくの両脇には三つもの大きな紙袋が提げられていた。
それから、ぼくたち――――いや、真衣さんは暫く買い物し、ぼくは両脇に五つもの大きな紙袋を提げる破目になってしまった。彼女は四件目か五件目が終わった後、ぼくをベンチのほうへ呼び寄せるとぼくに『お礼♪』と言ってアイスを渡した。
やっぱり、これはただの走りなのか。とぼくは少しがっかりし、渡されたアイスを頬張った。
『ん・・・！？美味い』
市販のアイスだったが、流石労働した後だけあって、その冷たさが妙に美味しく感じられる。
ぼくは、『は～』と息を吐き、真衣さんのほうを見た。
容姿端麗。まさしくその言葉が相応しい。買い物中も数々の男が彼女に目を奪われていた。
『真衣さん、』意を決してぼくは訊ねる。『今日はぼくは何のために呼ばれたんですか？』
『あれ、嫌だった？可笑しいな。皆私と買い物に行きたがるんだけど・・・』彼女は困ったように首を傾げた。『私って君にとってそんなに魅力ない？』
そんなわけじゃない。唯――――
『あれれ？どうしたの？夾くん？』
『なんでもありません。』

やっぱりいい。彼女に言うのが煩わしくなり、止めた。
『またまた～。ん？』彼女の視線の先をぼくは追った。『あれれ？あの五人は、確か同じクラスの・・・』
『大友、小手川、簗瀬（やなせ）、桃太、麻呂。』
『そうそう♪』彼女はそう笑うと立ち上がって手を振った。『桃太郎君♪やっほー』
『桃太だよ・・・』
ぼくは苦笑いした。

『あれ？真衣さんと新堂じゃん？どうしたの。』お転婆三人娘のリーダー格、簗瀬が尋ねた。
『別に。ぼくは真衣さんに・・・・』真衣さんを横目で見ていたら、突然彼女は抱きつき、ぼくの言葉は遮られた。『えへへ♪デェトだよ～』
『！？』
四つの瞳から殺意を感じる。ぼくは、そこから隠れるように真衣さんの後ろによった。
『へ～♪やっぱり新堂と真衣さんってそういう仲だったんだ。』
『ち、ちげぇよ。』
『アハハ、照れちゃってる♪新堂って可愛いトコあんのね』小手川がぼくの鼻を突いた。『そうだ。これからカラオケ行かない？こいつらだけじゃ物足りないからさ・・・』
見ると、麻呂と桃太もぼくと同じ様に紙袋をもたされている。相当連れまわされたんだな、と笑ってしまった。
『いいけど、真衣さんは？』
『私は勿論いくよ♪』と続けて彼女はぼくの耳元で呟いた。『キミの医師なんだからさ♪ある程度キミについていくから。もう二十歳だから親は実家だしね。』
『よし、じゃ決定♪』
彼女達の後ろで少しだけ桃太と麻呂が拳を握った。

プルルルルル、プルルルルルル
電話の規則的なコール音が鳴り響く。藤沢秋は電話を取った。
『はい、藤沢薬局ですが。』
『あ？秋ちゃん？』ゆっくりと聞きなれた声が秋の耳に響いた
『その呼び方は止めろよ。真衣』
『あのね。』彼女は少しも躊躇せず、秋に言った。『私ね。夾くんが欲しくなっちゃった。』

＊第七話　恋心（後書き）

＊第七話　ショッピングでしたが、もっとカッコイイ名前にしようと思って思考錯誤（↑あってるかな・・・）した結果、この題名になりました。
あと、秋目線とぼく目線で表現が若干変わってますがそのところはあまり突っ込まないで下さい。。。

＊第八話　精神ハ脆ク崩レ去ル（前書き）

※この第八話はあまりにも痛々しい話です。

＊第八話　精神ハ脆ク崩レ去ル

秋は耳から受話器を話すことができなかった。

『欲しい？』

予想外の言葉。でも、秋の“嫌な予感”は結果として――想像していたのとは少し違ったが――的中し、彼は壊れる。
受話器の奥で声が続けた。『秋ちゃん？き―てる？』
『聞いてるよ。』秋は受話器を持ち直した。
『いいでしょ？食べちゃっても』
『そのいいかたはやめぃ。』秋は溜息をついた。『でもどうせ、やめなよ。って言ったって真衣はやめる気はないんだろ？』
『当ったりぃ♪』
やっぱり――――、彼が壊れていくその様を見たい自分はご健在のようだ。秋は微笑を浮かべ、受話器を置いた。

何故こんな破目になってしまったのだろう？
今更後悔しても遅い。が、初めて後の祭りという言葉の意味を理解し、過去に戻りたいと言う気持ちに苛まれた。
ぼくはベットに寝転がり、あの時のことを思い出した。

カラオケボックス“歌姫（ウタヒメ）”神楽坂店（本店）
『じゃぁ、次は桃太郎君♪』真衣は華麗な歌声でＹＵＩのＣＨＥ・Ｒ・ＲＹを歌い終え、目の前にあったオレンジジュ―スに手を伸ばした。
『お、おう。』桃太は震える手でマイクを彼女から受け取り、拳をぎゅっと握り締めた。『それじゃぁ、大塚愛でさ、さくらんぼで～す！』

必死の言葉にも虚しく、女性陣は真衣さんの下に集まる。『真衣ちゃん上手いね♪』とか、キャピキャピした声は桃太ではなく、真衣さんのもとに響いた。
『可哀想だな。桃太のやつ。』ぼくは思わず呟いてしまった。
『そうだな・・・』真剣そうな顔で麻呂も頷いた。
『もぉ、じゅっぷんしかないよぉ！！！』暫くぼく達は歌い続けた後、真衣さんが呟いた。『でぅえっとでもやらない？』
『いいね！それ』簗瀬は笑った。『どうせなら、男女のデゥエットってどぉ？』横目でぼくと真衣さんを交互に見つめた。
『真衣さんと新堂やりなよ～。』小手川が簗瀬の心をよんだかのように（予め計画されていたのかもしれないが）簗瀬の言葉に追随した。
『はぁ？』勘弁して欲しい。ぼくは音痴なのだから。『なんでぼくが？』
『だって新堂、一曲も歌ってないでしょ？』
『そりゃそうだけど。』ぼくの心臓が高鳴り始めた。
『じゃ決定。』
『歌うのとか苦手だし、いいって。』
『もしかして～』簗瀬がぼくの顔を覗きこんだ。『恥ずかしいとか？』
『なにを？』鼓動が更に速くなった――――気がした。
『真衣さんのことすきなんでしょ』小手川が耳元で囁いた。
『ばっ、ちげぇよ。』
『はいはい。照れなくていいっての。いいよね？真衣ちゃん。』
『もち♪』
小手川は無理やり、ぼくにマイクを押し付けると、勝手に表から男女の恋愛デュエット曲を選び、送信した。
『～世界中の誰よりきっと～』
ぼくは意を決して、歌い始めた――――。
これが、間違いだった。歌わなかったらよかったって、思う。

『アハハッハハハ――――』大笑いがボックス内に木霊した。

ぼくの心臓は更に素早く脈打つ。誰も――ぼくの異変には気付かなかった。

手が汗ばみ、拳をぎゅっと握り締めた。

『なに？あれ。人間の歌？』小手川が腹を抑えて笑った。

ぼくは、ナイフをぎゅっと握り締めた。

オマエラガウタエッテイッタンダロ？

『そうだね～』真衣さんも笑い出した。

『へたくそだなお前！！！』麻呂と桃太も腹を抱えて大笑いした。

『下手糞！下手糞！』誰かが連呼した。

ナニ？オマエラ？ヤメテクレナイ？

『キャハハ～だよねぇ～』

『真衣さんかわいそう。』

『下手糞すぎだよ。』

『猿以下だな・・・・・・』

オマエラ、コロシテヤロウカ？

死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。

死ね。死ね。死ね。死ね。

死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。

死ね。死ね。死ね。死ね。

死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。
死ね。死ね。死ね。死ね。
死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。
死ね。死ね。死ね。死ね。ボクハ耳を塞いだ。胃がむかむかする。
無意識のうちに、しゃがみこみ叫びだした。
『あああああああああああああああ』

ボクノセイシンハモロククズレサル――――

『ああああああああああああああ』
皆唖然とぼくを見つめた。真衣さんがぼくに駆け寄った。しかし、
ぼくは真衣さんの腕に嘔吐し、再び叫びだす。
自制できなかった――――
『ああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ』
目の前が真っ白になった。
最後に見えたのは簗瀬と小手川の“ぼくに”怯えた顔だった――――
―。
真衣さんがぼくの頬に涙を零したような、気がした。

＊第八話　精神ハ脆ク崩レ去ル（後書き）

あまりに痛々しい話――――
絶対経験したくない、多分以後絶対読みたく無い話です。こんなことが無かったらいいんだけどな。
あとこの題名は変更無し。＊第八話　セイシンハモロククズレサルは、ぴったりな題名なきがします。因みに次号は急展開――――なっ、なんと！？

＊第九話　病院

病室のベットで（後で気付いたことだが）ぼくは夢を見ていた――――

それはまたいつもの夢でいつものように彼と問答を交わした。

『じゃぁ君はぼく？』ぼくは彼の言葉に返事をした。

『ううん。君はぼくであって、ぼくは君じゃない、ぼくは――――君の中にいる。だから、君とはこの中でしか会えない。』

『何故いつも消えてしまうの？』

『これが夢だからさ。夢だと自覚したとき――――』

夢？そうだ。これは夢だった。目が覚めてしまうような気がして慌てて目をぎゅっと瞑った。彼の顔が揺れて消えた。夢が変わった。

砂嵐が目の前に降り注ぎ青と黒の線が横に走った。

『I・・・・・m・・・・・　y・・・・・u・・・・・　・・・・・n・・・・・・u』

砂嵐の奥で白い文字が見えた――――。何故かそれは前のときよりはっきりと見えて、何かの暗示のような気がした、。

文字が消えた後、遠くのほうでヒトがまた見えた。

男の子でぼくと背格好が同じことがわかったが、それが誰かヤッパリわからなかった。

ぼくは、目覚めた。

隣で真衣さんがスヤスヤ眠っている。

ずっと看病してくれたのだろうか？目の下に大きな隈ができていた。

倒れてから何日がたったのだろう？

ぼくは辺りを見回したが日付を特定できる物は無く、“ケープ・マリーゴールド”の花がいけた花瓶がベット際に置かれていた。

看護婦さんがぼくの病室に入ってきた。

『あら、お気づきになられたんですね？新堂さん』その可愛らしい

看護婦さんはぼくに親しげに話しかけると、微笑を浮かべた。
『はい。あの・・・』
『七瀬サンって律儀な子よ』看護婦さんは真衣さんの頭を撫でた。
『三日三晩、君に付きっ切りだったんですもの。たった一人で』
『三日も寝てたんですか？ぼく。』
『ええ。』彼女は答えると、タオルを水に濡らして無抵抗のぼくの上半身を拭き始めた。『まぁ、でもお気づきになられたんなら今日明日中に退院できますよ。』
『そうですか・・・・』
真衣さんは罪悪感でも感じたのだろうか？大人の母性本能が働いたのか。あるいは他に理由があったのか知らないが、色々世話をしてくれたと聞き、心がほんわか熱くなるような気がした。
看護婦はぼくの体を粗方拭き終えると、『困ったときにはそこのボタンを押して私たちを呼んでくださいね。できるだけ早く駆けつけますから。』とナースコールのボタンの場所を教え、そそくさと病室を出て行った。
『はい。』
ぼくは真衣さんを見つめる。また、胸が熱くなった。
惚れてしまったのだろうか？
まさかと思いつつ、胸に手を当ててみる。
でも、ふいに怖くなって胸から手を下ろした。
ぼくは再び眠りについた。

『ちょっと！なによ～』聞きなれた声が聞こえる。僕は目蓋をゆっくりと開いた。
『んっ、ん・・・・』
『！！！！』七瀬さんは涙を浮かべぼくに抱きついた。
隣に看護婦さんがいたがその光景を見るなりそっと病室から出て行った。
『不安だったんだからぁ。』彼女は涙をぼくの頬にこぼした。『私

のせいで死んだらどうしようかと思った。』
『そっちかよ（笑）』
ぼくたちは暫く談笑をして四日間真衣さんがどれだけ大変だったかくどくど聞かされた。
『爽くん。今日中に退院できるって！だから、明日には多分クラスの皆に会えるよ』
彼女のいっていたとおり幸ぼくはその日のうちに家で安静ということで退院した。
家までは真衣さんが車で送ってくれたが、流石にお互い一中学生ということになっているぼくたちが（しかもカレカノでも幼馴染でも近所でもない）一緒にいることはまずいということとなり布団の用意だけして帰っていった。
『明日にはクラスの皆に会える・・・・・か。』ぼくは呟く。
それがぼくの望んでいることなのだろうか？
学校行きたいと僕は思っているのだろうか？
ベットにつくと、ぼくはすぐ眠りについてしまった。
そのときはまだ、期待していた。
学校はぼくの居場所なんだって。あまりにも平凡なぼくの居場所なんだって。
そして、知らなかった。
ぼくの望んでいた願望がこんなにも恐ろしいものだったなんて。

＊第九話　病院（後書き）

夢の中で出てくる白い文字あれは、あと五話くらい先の題名にするつもりです。あっ、でも実はあの言葉もう文中に出てきてるんですよ。日本語でですけどね！

そうそう、この話の題名にも悩みました。本来、あの白い文字を題名にしようと思ったんですが最終話のほうに入れたほうがカッコイイ気がして止めました！

＊第十話　僕の望んでいたはずの願望

プルルルル　プルルルルルルルル・・・
秋の携帯が鳴り響く。
『はい。藤沢薬局ですが』
『秋チャン？私だよ――――』彼女はいつもより悲しい声で言った。
『なんだ、真衣か。どうした？』
『あのね――――』

こんな形で願望が叶ってしまった今となってやっと言えることだが、“平凡”のときのほうが幸せだった。願望屋“藤沢秋”の言うとおり、ぼくは贅沢だったらしい――――。
その日、桃太は来なかった。シャワーを浴び、いつものように家で待っていたが、外には誰もおらず、“きっとぼくが今日から登校するのを知らないのだろう。”と勝手に決めつけ、ぼくは一人で登校した。
不思議とその日はあの感情が――――葛藤がこみ上げてこなかった。
校門をくぐるといつもそこそこ仲の良いクラスメイトに会い“おはよ！”と声をかけたが、彼は苦笑いを浮かべ“お・・・おう”としか、答えてくれなかった。ぼくが“どうしたの？”と声をかけると彼は黙り込んでしまったため、気分でも悪いのかと彼を抜かして、教室へ向かった。
悪夢はそこからだった――――。
ガラッ、
教室のドアを開けると、皆は一斉にぼくのほうを振り向いた。
『やぁ、おはよう。』
誰も反応はしない。仕方が無く、ぼくは席に着いた。
ビチャ――――え？
腰を上げると、水風船が割れていた。

周りがクスクスと笑う。

『キモい。死んじゃえ』

机の上に油性のペンで落書きがしてある。訳がわからず、呆然と机の前に立ち尽くした。

周りがまたクスクスと笑った。よく見ると、桃太がこっちのほうを見ていた。悲しげな表情をしている。必死で助けてくれとサインを送ったが上の空で気付いてくれないようだった。不意に涙がこみ上げてきて、ドアのほうへ向かった。途中真衣さんとすれ違ったが、向こうは気付かないようだった。

『何故？』

不思議と冷静だった。ぼくはすぐさま校門を出て、とりあえず走った。

自分でも何処にいきたいのかわからない。何処にも行きたいわけではないのに足は勝手に動く。暫くすると、十字路が見えてきた。何処かで見覚えがあったが信号が青だったのでそのまま突き進んだ。

次第に涙がこみ上げてくる。

あの時のように発狂しそうになった。しかし、ポケットに手をいれて、ナイフが無かったことに気付く。

ぼくは益々不安になった。

さらに走って走って、ぼくが行き着いた先は――――無意識のうちに向かった先は――――“願望屋”藤沢秋のもとだった。

七瀬真衣は教室の扉を開いた。

辺りを見回してみる。いつもの光景――――

ただ、そこに何かが足りない。

彼はいるだろうか？

確か昨日電話したときには“明日は行くから”といっていたはず。
いやな予感がした。

『キモい――――』

彼の机に油性ペンで走り書きされた文字。
彼女は思わず叫びだしそうになる。聞きたくなる。
『誰がやったの？』って。『これは許されざる行為だよ』って。
誰かが肩を叩いた。
『真衣さん、おはよ！』
笑顔を浮かべている。確か彼は麻呂といった気がする。とりあえず、訊ねてみたかった。彼が今何処にいるか。
『ねぇ、新堂君は何処にいるの？』
小さな声で言ったはずなのに彼らへの憤怒からか思わず声が大きくなった。何人か彼女のほうを向いた。
『さぁな。』麻呂は薄笑いを浮かべた。『さっきいたけど、教室に入ってきた途端血相変えて出てったぜ』
辺りからクスクス、笑いがおこった。
『――――！！』
『泣いてたよね。』誰かが言う。『うん。マジきもかった』
『真衣さんも同じ目にあいたくなけりゃ、あいつと関わらないことだね。』
『そうそう。』女の子が一斉に笑った。

思わず、怒りがこみ上げた。
昔の過去が蘇る。
セラピストになる前。藤沢秋に拾われる前の出来事を、彼女は思い出した。

＊第十話　僕の望んでいたはずの願望（後書き）

今回の話は非常に痛々しく、書いてて辛かったって思う。早いトコこの話も終わらせたくなっちゃいました・・・・・

ところで、次号は真衣さんの過去編。

因みに過去編が終わり次第、最終ステージへと突入させたいなと思います

＊第十一話　許せない！！！（前書き）

今回より蓮宮ヨイチ、改めまして蓮宮志奈多です。
よろしくお願いします

＊第十一話　許せない！！！

真衣と言う名はお父さんがつけた名前だ。
私を生んですぐ母は死に、孤独だった私に少しでも幸福が訪れるように、人への思いやりが厚く、誠実で奉仕が良くでき、より幸福な子に育つように願いを込めて父がつけてくれた。
そんな父も私が三歳のときに交通事故で他界した。
身内が殆どいなかった私は孤児院に入れられた。
幼稚園、小学校では汚い、臭いと虐められ、進学した中学校でも私は机に落書き・物を隠す・リンチなどの虐めを受け不登校になった。
それからまもなく私に反抗期が訪れ、元々孤児院でも孤独なほうだった私からは友達が消え、誰からも相手にされなくなった。私は何故か無性にイラついて髪を染めたり、耳に大きなピアス穴を開けたり、煙草を吸ったり万引きしたり援交したりした。そのうちに高校生ぐらいの年になって素行も悪かった私は孤児院を追い出された。

『私は孤独だ。』

その頃は丁度思春期で色々悩んだりした。
心に空白があることには気づいていたけれどその心の空白は産まれてからずっと白い場所。
そこが白いことに慣れっこで、別段気にしなかった。
だから、孤児院を追い出されても私の孤独は変わらなかったし、生活も変わらなかった。
そんなときだった。私は出会い系で知り合った男のヒトから紹介を受け“願望屋”の扉を叩いた。

『ようこそ。願望屋へ』

彼は初対面な私を温かく迎えてくれた――
私は何故か涙が止まらず、その場に泣き崩れた。
温かかった。彼は火傷しそうなくらい温かなヒトだった。
初めて自分を認めてくれるヒトと触れ合ったような感じがした。“秋”に会ったとき、驚きを隠せなかったのは今でも鮮明に記憶している。きっとそれは、彼が余りに幼かっただけではなく、彼が認めてくれただけでなく、何か彼から不思議な力が感じられたからなんだと思う。
それから、私は自分がどれだけ辛かった人生を歩んでいたのか知ることになった。

だから――
私は一瞬眼を閉じ、一呼吸を置いた。
『私はあんた達のようなやつが許せない！！！！！』

彼のため――
いや昔の自分に――
秋と会う前の自分に――
言い聞かせるように――

私は言った。
たとえ嘲笑されても大声で笑われても構わないって思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

同時刻　願望屋
『久しぶりだね。そろそろ来ることだと思っていたよ。夾くん♪』
『え？』ぼくは思わず訊ね返した
『そんな驚くこと無いだろう？運命は必然にせよ、偶然にせよ君が来ることは予測ぐらいできる。』彼は続けた。『まぁ、学校の時間

なのにそんな慌ててるところを見るとそれどころじゃないようだね』
『えぇ。願望屋さん』ぼくは苦笑いを浮かべた。『どうやらカラオケで発狂したのがまずかったみたいで皆口を利いてくれないみたいなんですよ。』
『どうだい？虐められれるっていうを経験してみて』彼はクスリと笑った。
『正直。参りましたね。まさかぼくの望んでいたことがこんな現実だったなんて思いもよりませんでした。』
『だから、』彼は声の音量を少し上げた。『言ったでしょ？君の悩みは贅沢すぎる・って。』
『ええ。その通りでした。』ぼくは肩を落とした。『でも――――、ぼくは依頼したはずですよ。こっちの意味で平凡脱却は嫌です。って』
『まぁ、そう慌てないで。スマイル。スマイル。』
『でも――――、』彼はぼくの口を人差し指で塞ぐとウインクした。
『ちっちっち。ちゃんとぼくの策通りシナリオは進んでいるんだから。』そして、大声で言う。『君の願望の正体を見つけたよ！夾くん♪』

＊第十一話　許せない！！！（後書き）

当初、＊第十一話の題名は過去（または出会い）という題名にして
真衣ちゃんだけを綴るつもりでしたが、
どうも書きにくかったので変更いたしました。

＊第十二話　外傷体験

『願望の正体を。・・・ですか？』ぼくは思わず聞き返した。
『うん。願望の正体♪』彼は一呼吸おき、訊ねた。『でも、それには一つ、大事な欠片（ピース）が欠けている。そうこの論理の障害となる大事な大事な欠片（キー・ピース）が。だからはっきりさせときたいことがあるんだ。一つ聞いてもいい？夾くん♪』
『えぇ』
『夾くんってさ、何かトラウマある？』
単刀直入な質問だった。なんて、答えればいいか迷う。
思い出そうとすると、気分が悪くなり悲しくなり、泣き出したくなる。
誰かに聞こうとしても誰も言葉を濁して答えようとしてくれない。
自分でもはっきりと覚えてはいないけれど、昔何かがあった気がする。

もっとも、確証は無いのだけれど。

ぼくの頭はナニを隠しているのだろうか？
それは、謎なのかそれとも単なるトラウマなのか？
誰かに訊いたことがあったが誰もがその話題を語ろうとはしなかった。
だから、とりあえずぼくは『ありません。』と答えた。

『それは、確実？』
『いえ』正直にぼくは答えた。『わかりません』
『そうか。そうだよね』彼は苦笑した。『でもね。夾くん。もしその経験（トラウマ）が夾くんを“誰も信用しない性格”に変えた直接の原因なら、

その因果は成立し、君が何故悩んでいたかさえも理解することができるんだよ。』

『・・・・・』

『だからね。もし、“誰も信用しない性格”になった直接の原因がトラウマだとしたら、それを治さなきゃ、君の願望には近づけない。すなわち、“誰も信用しない性格”を治さないと前に進めないんだよね。まぁ、先天的なものだったとしても処方は違えど治すことは可能だけどね。』

『仰っている意味がわかりません』ぼくは、俯いた

『う～ん。とりあえず君の症状？っていうのかな？願望の原因は恐らく先天的なものかもしれないけれど、何らかのトラウマへの“恐れ”によって生じた“誰も信用しない性格”“孤独への恐れ”に思春期特有の“平凡で誰からも必要とされない”っていう平凡な悩みが絡んで生じた偶発的な症状なんだよね。その年ででっかい爆弾抱えちゃってるいる奴には結構多い症状なんだけどさ。君のはその中でも異端。結構な恐れ具合だよ。』

頭の中が混乱する。この人はいったいナニをいっているのだろうか？彼は尚も続ける。『同じ夢を何回も見ることは無い？』

『何故です？』僕は思わず訊ねてしまった。

『いやね。もし、何らかの“トラウマ”があるのなら、そのことを覚えているいないに関わらず、脳は覚えているからさ。その怖さっていうのかな？恐れは現実世界ではデジャヴぐらいでしか感じれないにしても夢の場合鮮明に現れる場合が良くあるからさ』

夢・・・ね。

記憶を辿ってみる。

すごく暗い場所。

周りには誰もいなくて、ぼくは一人ぼっちで座っている。

けれど、何も見えないわけじゃなくて微かな街灯の光に照らされ住

宅街が見えた。

そういえば、来るときに見たあの交差点は夢に出てくるように近かった気がした。

それは単なる空偶然かもしれないが、確かに。あの時は。

『でも、あれは偶然だよな・・・・』

ぼくは呟く。ほかにも、何度も見る夢があっただろうか？

『タスケテタスケテタスケテ』

え？

なんだろうか？一瞬、眼の奥で大量の水が見えたような気がした。

少し気分が悪くなる。

『でも、違う・・・よな？』

自分に問いかけて納得する。それはぼく自身が無意識に思い出したくないから信じてないのかもしれないし、唯考えるのが面倒くさかっただけかもしれないのだけれど。

『まぁ、どちらにせよね。夾くん』彼はぼくの首筋に触れた。『ご都合主義のファンタジーよろしく。ぼく流のやり方ですぐにでも君を救い出してあげよう♪』

それはまるで最初から知っていたような口ぶりだった。

『藤沢さん流の・・・理由ですか？』

『そうだよん♪』願望屋は微笑を浮かべた。『ぼくちゃん流の理由。あっ、あとさ。ぼくちゃんのこと“藤沢さん”なんて堅苦しい名前では呼ばないでね。“秋”とかでいいんだよ？』

『・・・・・・・』

『まぁ、いいや』彼は笑った。『ここから先は真衣が帰ってきたら話すから♪』

＊第十二話　外傷体験（後書き）

＊外傷体験～ｔｒａｕｍａｔｉｃ　ｅｘｐｅｒｉｅｎｃｅ～とは、心的外傷、即ちトラウマのことを指します。典型的な心的外傷の原因は、幼児虐待や児童虐待を含む虐待、乱暴者による強姦、心無い戦争、理不尽な犯罪や事故を含む悲惨な出来事、実の親によるＤＶ、大規模な自然災害などであるそうです。【ウィキペディア（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ）より抜粋】

また、この話もそろそろクライマックス！ご期待ください！

＊第十三話　接吻

『カチャッ』
遠慮気味にドアが開く音がした。
扉の方を見るとびしょ濡れの真衣さんが立っていた――――。

『真衣さん！！！』
びしょ濡れの真衣さんのほうにぼくは駆け寄った。
制服は勿論、びしょ濡れでよくみると右腕から出血している。腕まくりしたワイシャツが紅く染まっていた。
『真衣さ・・・・』
思わず、正面から覗いてしまった。水によって透けたブラジャーを目の前にして少し恥ずかしくなった。
『どうしたの？』
願望屋、藤沢秋はいかにも興味無さそうに安楽椅子に座りながら聞いた。
『なんでもないわ。秋。』真衣さんは言った。『ただ、帰ってくる途中で雨に濡れただけ』
『そう。』
彼は読んでいた漫画に視線を落とした。
本当にそうだろうか？
一瞬、見えた。悲しい眼――――
見たことがあるからわかる。
絶望に満ちた眼――――
彼女は――――。
『真衣さん。どうしたん――――』
『ごめんね。秋、わたし少し休んでいい？』
彼女はぼくの言葉を遮るように秋に訊ねた。
『・・・・』

『真衣さ・・・・』
『いいよね？』彼女はもう一度ぼくの言葉を遮って、秋に訊ねた。
『うん・・・』秋は漫画から顔を上げると、小さな声で呟いた。『暫く休んできていいよ』
『ありがとう。』彼女は少し笑うと、ぼくに言った。『すいません。依頼人（クライエント）。』
どこか悲しげな表情だった。
彼女はもう一度微笑んだ。
『！？』

一瞬だけ、本当に一瞬だけだったから何がなんだかわからなかった。
彼女はぼくの頬にキスをして正面の扉から出て行った。
『真衣さん！！』
気付いたとき、彼女の姿はそこには無く漫画を読んでいる秋の姿だけが願望屋の中にはあった。
『秋さん、真衣さんどうしちゃったんです？』
『・・・・』秋は答えてくれなかった。
『答えてくださいよ！』ぼくは彼から漫画を奪い取ると、言った。
『なんで、貴方はそんなそっけない態度なんですか？秋さんが心配じゃないんですか？』
『別に。』秋はぼくを睨みつけた。『真衣はなんでもないって言ってるんだよ。かまわないでしょ？』
『そんな・・・・！！？』
『とにかく僕は干渉しないよ。』
『もういいです。』ぼくは彼に一瞥して、願望屋のいつもより思い扉を開けた。
ぼくは辺りを見回したけれど、やっぱり真衣さんの姿は何処にも無かった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『真衣。そこにいるんでしょ？』漫画に眼を泳がせながら秋は言う。
『でてきてよ。怒らないから』
『・・・・・・』
『報告しにきたんでしょ？本当は。新堂夾のこと。でも、彼が願望屋にいたから、出てったフリをした。』
『正解。』
『で、その右腕の傷は何？あいつらとトラブリでもした？』
『別に。』彼女は言った。『帰ってくる途中で雨に濡れただけって言ったでしょ？』
『はい。嘘。大方お前の持病の障害がトラブルを引き起こしたんだろ？』
『全く秋ちゃんは何でもお見通しね。』彼女は言った。
『それなら、ますますダメじゃないの？“君と同じ障害”を持つあの子を放っておいちゃ』
『私は後で探しに行くつもりだけど。でも、秋があの子を放り出したんじゃなくて？』
『そうだね・・・僕も後で探しにいくさ。でも――』
『でも――？』
『その前に、その腕に傷を負ったトラブルのこと聞かせてくれるかな？』
『それなら秋の言う通りよ』私は言った。『私に棲みつくあの忌々しい障害のせいでね。』

＊第十三話　接吻（後書き）

短い？というより、文字数が少ない話です。
サブタイトルがなかなか思いつけませんでしたがどうにか首尾よく接吻になりました。

＊第十四話　獅子

七瀬真衣という名から想起する彼是。
臨床心理学者。セラピスト。カウンセラー。治療者。依頼実行者。
執行人。願望屋藤沢秋の所有物。憤慨する虹色の鬼神。パニック障害。孤児。虐め。孤独。美人。二十歳。
『そして、二重人格・・・・・』
秋の発したその言葉に、真衣は反応する。脳裏にさっきの光景が再び蘇った。

『私はあんた達のようなやつが許せない！！！！！！だって？』
『馬鹿じゃないの？』
『そんなに新堂が大事？』
『なに熱くなってんの？』
嘲笑するクラスメイト。
脳裏に焼きつく、嫌らしい視線。まるで、人を貶すような笑い顔。
集団で私を取り囲むように彼らは近づいてきた。
ふと、想起する――小中学校での虐め。

一瞬、記憶が失われる。
私は精神世界に引き込まれた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
真っ暗な闇の中――。
コポコポコポコポ
何かが音を立てている。

ここは何処だろうか？

私は何処かを深く深く逆さになって落ちていた

眠気が私を襲った。
コポコポコポコポ

私は何をしているのだろうか？

私の名前は何だっただろうか？

拳を握ると、生暖かいものが私に触れた。
手を開くと、掌には男の子の写真が乗せられている。

彼は誰だっただろうか？

私は深く深く落ちてゆく――――

そうだ、彼は新堂夾――――
私は不意に思い出し、まじまじと彼を見つめる

私は深く深く落ちてゆく――――

行き先は何処だろうか？
彼の写真を見ながら、記憶を弄る。

自分の名前は、七瀬真衣
そうだ。私は臨床心理学者になったんだっけ？
願望屋、藤沢秋――――

次々と思い出したけれど、それらはポッと現れてはすぐ消えた

『ここは何処？』

何だか訊ねてみたくなった。

『ここ？ここは君の深・・・・心・・・・・・』

驚いたことに誰かが答えた。

その声は全部聞き取れなかったけれど、何だか懐かしい気がした。

『え？』私は尋ね返した

『ここは君の深層心理。精神の奥深く』誰かが答えた。

『何故、私はここにいるの？』

『君が求めたからさ』誰かが教えてくれた。

コポコポコポコポコポコポ

私は深く深く落ちてゆく――――

『私が？』私は耳を疑った。『ありえないわ。だって、ここなんだか辛気臭くていたくないもの』

『でも、懐かしくないかい？』誰かは笑った。『いやな場所だけど何処か安心できる』

『たしかに・・・・・そうね。ところで、君はだぁれ？』

『ぼくかい？』誰かは言った。『君は知ってるはずだよ？兄妹』

『え？』

『ぼくに、少し君の体を貸してくれるかい？』

私は無意識のうちに頷いていた。

『暴力じゃなく“ことば”で――――制裁ではなく、“正しい方向に導いて”あげてね。』

不意に光が見えた。私はまた、何かを訊ねようとしたけれど、私は

なんだか安心して眠りに落ちた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
『どうしちゃったのぉ？七瀬さん？』
クラスメイトの声が聞こえる。“俺”は、眼を開けた。

『ん？あ〝？あ〝あぁ・・・俺は“七瀬真衣”じゃねぇ。』邪魔な長髪を俺は結び、微かに微笑した。『七瀬徹。あいつの弟であり兄貴だ。』

久しぶりの現実世界に、少し暴れすぎるかもしれない気がした。

＊第十四話　獅子　（後書き）

非常に長いサブタイトルで申し訳ございません。
＊第十四話　解離性同一性障害～Ｄｉｓｓｏｃｉａｔｉｖｅ　Ｉｄｅｎｔｉｔｙ　Ｄｉｓｏｒｄｅｒ～とはいわば二重人格のこと。⇒変更・・ニジュウジンカク⇒二重⇒（なんか眠れる獅子みたいだったので）獅子（ライオン）
すこし、今回の話はファンタジックじみてますがどうかお許し願います
さてさて、何故か簡単な回想だったはずが、のっちゃいまして二話になっちゃいました。すいません。
あと、余計かもしれませんが、心の奥底にて真衣と会話するときは“ぼく”。でも、現実【リアル】にでてくると俺口調になるキャラです。
性格は次話で明らかになりますのでお楽しみに

＊第十五話　喧騒

『だ・・誰？』

『俺・だよ、悪いか？』俺は笑う。『小手川くる。』

『な！？』

『あと・・・簗瀬千賀子。お前らのせいで“俺”が出てくる羽目になっただろうが。』

『どういうことよ！』小手川が尋ねた。

『あ～、あと、門・・・なんとか桃太郎とマロンパイだっけか？』

『誰だ？』桃太が訊いた。『真衣さんじゃネェだろ？』

『何度も言わせんな。俺は“今”は真衣の兄貴さ。それよりもさ、軽々しく呼ぶなよな。真衣のことを下の名前で。呼んでいいのはこのクラスでは依頼人（クライアント）の新堂夾だけだぜ？』

『真衣さんは何処へ行った？』麻呂が俺を睨みつけた。

『お前らが虐めたからな。暫く出てこないよ。ところでさ、俺・オマエラ殺しちゃってもいい？』

俺は―――指を刺す。『そこにいるさ。小手川くる、大友真利、簗瀬千賀子、麻呂太一、桃太郎くんたち。』

『ちょっ・・・なんであたしが入ってんだよ。』

『なんでだよ！オマエに俺たちが何した？』麻呂が俺の胸倉を掴んだ。

『可笑しいな？四日前、小手川くる、大友真利、簗瀬千賀子、麻呂太一、桃太郎の以上五名が、偶然月馬ヶ丘高級ショップで新堂夾と、俺・七瀬（まい）徹と出会い、カラオケボックス“歌姫（ウタヒメ）”神楽坂店にて、歌を歌った事実に虚偽はないはずだが。』

『カラオケボックス？それがどうした？関係ないだろ？今の話と』

『それがな、関係あるんだよ、麻呂太一くん。』俺は言った。『ま

ぁ、別にカラオケいった行為自体は確かに問題ないんだが・・・』
『はぁ？俺たちがお前たちに何をしたって言ってるんだよ？俺は真衣さんに何も危害を加えてないんだし、“七瀬徹”だか兄貴だか知らねぇが、おまえとは初対面だ』
『別に真衣に危害を加えたからという理由だけで怒ってるわけじゃないんだけどな～。俺。いまさっき君たちが言ってた暴言は別だけどね。でも、それはクラスメイト全員でしょ？俺が言っているのはね。カラオケの後、お前たちがクラスメイト達に送ったメールのことなんだけど？』麻呂の手を振り払う。『わかる？』
そして、一呼吸おく。『新堂夾に対する中傷チェインメール、そして、俺の妹である七瀬真衣に対する今の暴言の数々が赦せねぇって言ってんだ。勿論、君たち五人だけじゃなくて暴言吐いたクラスメイト全員に制裁は加えるけどね
でもさ、その前に新堂夾に対する中傷チェインメールについて聞きたいんだけど。クラスメイト全員に送った。彼は何をした？君たちに。』
俺の声が静寂の中に響いた。

セイサイダ――――

『なんで知ってるんだ？そんなこと』不意に麻呂の声が聞こえた。
『確かに、別に新堂夾に対する中傷メールをチェーンでクラス全体に回した。ナンデ知ってるかしらないが別にいいだろ？俺、あいつのこと嫌いなんだから。』
『新堂が嫌い？真衣が来るまでそうは見えなかったぜ、全く。真衣がべっとりしてた新堂がうざかっただけだろ？で、新堂夾が障害らしき物を患っていると四日前カラオケボックスで知り、それをネタにクラス全体で新堂夾を虐めようとお前はたくらんだ。』
『な？！』
『間違ってないだろ？』俺は囲んでいるクラスメイト達を見回す。

『それともまだ言い訳があるのかな？』
『！！！！！』
『近頃のガキは。自意識過剰な奴らばっかりだね』俺は言った。『真衣が、がお前に惚れてくれると思ったか？自惚れるなよ。麻呂太一（ずらぶさいく）』
『うるせぇよ。』
『うるせぇだぁ？』思わず殴りかかりそうになる。『俺は、真衣とボディを共有してるんだ。ぶさいく面にやらしい眼で見られるのは不愉快なんだよ』
『うるせぇ。』麻呂が俺を押し倒し騎上位に乗っかる。『！！！！！』鼻骨に、ストレートが決まる。
右フック。左ストレート。アッパー・・・麻呂は俺の顔を――真衣の顔を殴る。
『この変態野郎が！！！』思わず俺は手を振り上げた。
『暴力じゃなく“ことば”で――制裁ではなく、“正しい方向に導いて”あげてね。』
真衣・・・・！！！不意に思い出し殴るのを一瞬躊躇った。しかし、俺の放った拳は止まる事無く麻呂の頬に直撃する。一瞬、麻呂は怯んだ。が、すぐに体制を整えると、笑った。
『お前の力こんなもんかよ』
『あ？俺だってな今、ぶさいく面の顔面もっと不細工にしてやりたくてうずうずしてんだよ。』
俺は体を捻って麻呂をどかそうと思ったが、体重が真衣の体の推定二倍があろうかと思われる巨漢を動かすことは不可能だった。
『死ね！！！』彼は拳を振り上げた。
よけきれず、拳が顔面に直撃する。
イマナニヲシタ？コイツ？

マイノガンメンナグリヤガッタヨナ？
オレノイモウトノ――ソシテオレノカオヲナグリヤガッタナ

何かが吹っ切れた――――気がした。

――――――ゴメンネ。マイ・・・・・

バシッ
俺の拳が、奴の何かに跳ね返された――。にも、関わらず俺は襲い掛かった勢いのまま、奴の体に、拳を当てた。
――鈍い音がした。
『え・・・・？』
俺も奴も驚いた様な声を上げた――。
『！！！！！！』

そこからは、もう覚えていない。無防備なのにも関わらず必死に素手で奴に殴りかかった。
気付いたとき、そこで、奴は気絶していて、俺の拳は紅く染まっていた。

その一部始終を真衣は精神世界で見ていた――――。

＊第十五話　喧騒（後書き）

下手糞。ですね・・・
直しますと呟きつつ、一ヶ月近く推敲までに時間がかかってしまいました。
お詫び申し上げます。
また、特に、十三話接吻より、この十五話ぐらいまでは恥ずかしながら読み返してみると矛盾点が多多あり、推敲の多さも半端ない量でした。話の大筋はかわってないと思いますが、まだ残っている矛盾点発見されたら、指摘してくださると助かります

＊第十六話　相似

ここは何処だろう？
コポコポコポコポ・・・
コポコポコポコポ・・・
真っ暗だった。
見たこの無い世界。何だか不安になった。

世界が急に見開いた――――

そこは荒れ果てた荒涼地帯だった。
砂嵐が目の前に降り注ぎ青と黒の線が横に走った。

ぼくは、やっとこれが夢だと悟った。

でも、いつものように、白い文字は見えなかった。
ぼくの前に黒い影が現れた。
『ぼくは誰？』影は唐突にぼくに話しかけた。『ぼくは誰？』
『・・・・・』
『何故答えてくれないの？』
『ぼくは君――――新堂夾。』影は尚も続けた。『君の事は何でも知ってる。君は？』
何を言っているのだろうか？
『・・・・・・』
『答えてよ。わからないの？ぼくにはわかるよ。君が何を考えているか。ぼくは誰なんだろう？生きてる価値はあるのだろうか？人生とはなんだろうか？』影は笑った。『ぼくは君だけど君はぼくじゃない。矛盾。可笑しいとは思わない？』
独り言のように彼は呟く。

『ぼくは君と一心同体。表裏一体。ぼくから見れば。でも、君から見れば赤の他人。』
わかる？、彼はぼくに尋ねた。
『君は僕のことを知ろうともしない。それどころかぼくの存在さえ知ってくれない。ぼくはもうウンザリなんだ。』
『・・・・・』
『ぼくは君のことは何でもわかる。君のしていること、感情、毛の数まで何でも。だから、君を殺すことだって容易いし、成長させることだって同じく容易い。』
『君は誰？』
『ほら、ヒトに聞こうとする。やっぱりもうぼくはウンザリだ。』
ぼくは訊ねた。『じゃぁここは何処？』
『ここは君の心の中。“墓場”“荒涼”あああ、もううんざりだ。君がぼくを知らないのに、ぼくは存在したくない。君の事なんて知りたくない。』影は言った。『もう終わらせてもいいかい？』
『え――――』
風が起きた。影は、それに飲み込まれ、ぼくの目の前は真っ黒になった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
『真衣――――・・真衣――――・・・』
誰かの声が聞こえる。誰だろうと私は眼を開けた。
『どうした？』眼を開けるとそこには秋がいた。『大丈夫か？』
『ええ。大丈夫よ』
そうだ。私はここにいる――――。何故だか安心した。
『全く。急に倒れて。どうしたの？』
『別に。』私は答えた。『それよりね。秋。私と夾くんって似通った点があるように思うの』
『似通った点？』
『ええ。例えば――――』私は、秋の書棚のほうへ向かった。そして、洋書の医学書を取り出す。『“Ｄｉｓｓｏｃｉａｔｉｖｅ Ｉｄｅ

ｎｔｉｔｙ　Ｄｉｓｏｒｄｅｒ”――解離性同一性障害とかね』
『二重人格があるふうには見えなかったけど』
『私もそうだったでしょ？確証は無いけどね。でも――』私は言葉を繋いだ。『リスカをしてる時点で私とも似てるし・・・』
『気付いたの？夾くん見せないように隠してたのに。』
『わかるわよ。私もそうだったし、一応これでもセラピストなんだから。ある程度観察していればわかるわ。あと――――ひとを信用してないところ。恐らく過去に何らかの経験（トラウマ）があるんだと思うわ』
『でも、それは忘れていると考えていいよ』
『え？』
『僕も訊ねたんだ。でも、彼は答えてくれなかった。』秋は笑った。
『最もそれは彼が言いたくない過去だった可能性もあるけどね。』
『どちらにせよ』私は洋書を持って秋の横に座った。『私と似通っている。ううん。“完璧なる相似”の新堂夾くんは私よりも手強い――――性質（たち）の悪い病にかかっていることだけは確かね・・・』
『・・・・で？セラピストさんには見つかったのかな？彼の処方箋』
『ええ。』私は頷く。『でも、とりあえず彼を見つけるのが先決よ。』
私は立ち上がると、雨の降る外へと出た。

＊第十六話　相似（後書き）

この話のサブタイトル
“リンク”、“相似”、“うんざり”
の三つで悩みましたが、最終的に相似に落ち着きました。あと、十五話と最初のシーンは繋がっておりません。最後と同一時間軸です。また、あと、五・六話で完結予定。最後は予想外？いや、予想内？のクライマックスが待っています。宜しくお願いします。

＊第十七話　捜索

何処にいるのだろう？彼は。
ザァザァ降る雨に打たれながら町をぐるりと一周回ったのに一向に彼が見つからない現状に私は絶望感を抱く。
『見つかった？』
秋が願望屋から出てきて、私に尋ねた。わたしは、ううんを首を振る。
『全然。通りの人にも聞いてみたけど見てないって。』
こういうときに不謹慎だけど、私は一瞬、なんだか、このまま秋を見ていたい気がした。珍しく願望屋に閉じこもっていない藤沢秋を。
『雨なのに・・・・・ね。』秋は呟いた。『大丈夫かな？』
『え？』
『平気かな？』
珍しく彼は弱気だった。
『そんなのわかんないよ。』私は言った。『でもさ、彼は私を探しにいったんだったら、私は責任もって探す。』
『ぼくもだよ。一応、追い払ったのはぼくだし・・・幾ら彼がきちんとしてるって言っても、彼は中学生だし、あの症状は立派な障害だもん。もしかしたら、どこかで叫んでるかもしれないからね・・・・』
『中学生・・・・・か。』
言いつつ、私は気付く。また、秋も十五歳の子供なのだ。世間を少し知っているけれど、精神的にはまだ未熟な無垢な少年。
『よし』彼は少し考えると、言った。『真衣はさ、砂嘴川駅前近くのネットカフェとか喫茶店とか探してみて。ぼくはさ親とか医療機関とか当たってみる。』
秋は願望屋に戻り、私は一人になった。
そういえば、夾くんは一人でいて予想外に出来事が起こると叫びだ

すとかいっていたっけ？
どんな気分なのだろう？
悲しいのだろうか？淋しいのだろうか？
でも、もし、彼が今その状況にあるにしても、私のとった行動は――新堂夾を追い払った行為は――間違ってなかったと思う。
多分、彼にあの事実を言ってしまっていたら、彼は――――
『でも、言わなきゃいけないのかな？この依頼に終止符を打つには・・・・』
正直言ってもう暫く言いたくなかった。“セラピスト”として、“経験者”として。
もう少し、スパンをおいて、彼の精神を安定させてからのほうが良い気がしたからだ。
『辛いや・・・・』私は呟く。
でも、誓ったように
私は、彼のため
そして、過去の自分のために
秋と出会う前の自分のために
私は彼を助ける。
私は、髪を掻き揚げた。『絶対、その世界から救いだしてあげるからね。』
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
自分に問いかけてみる
――――ぼくは誰だかわかる？
彼に僕の声は聞こえない。
何度問いかけても。何度訊ねても
新堂夾には、
主には

僕の声が聞こえないのだ。

世間に問いかける

誰も答えてはくれない

何故なのだろう？

不幸な境遇。芽生えるべきでなかったのに芽生えてしまった僕という人格

僕が生まれたのはいつのことだっただろう？

誰も知らない。何も知らない。僕を生み出した本人でさえ僕の出生は愚か存在さえ忘れてしまっている。

知りたかった。

何故こんなにも僕が不幸なのか？

知りたかったけれど・・・・

もう、うんざりだ

もう終わらせたい――――

★嫉妬する、“ぼく”のふたつめの感情、“僕”・・・・

＊第十七話　捜索（後書き）

＊第壱話　日常に始まり、サブタイトルをできるだけに文字にしようと一新してみました。
また、第十三話接吻より、第十七話捜索までかなりの数の矛盾点を発見しましたので修正しました。まことに申し訳ありませんでした

＊第十八話　発見

ぼくは、泣いていた――――。
誰も居ない神社の石段で。

真衣さんを追いかけたつもりなのに・・・

自分が何をしているのか全く理解できない。
もう自分が自分でわからなかった。
あの問いかけてきた自分は何なのだろうか？
ぼくは誰？え？新堂夾？そうだっただろうか？

何かが狂い、狂い狂う

気分が悪かった。何故ぼくはここにいるのだろう？
ぼくは何をしているのだろう？
狂っていく。何がなんだかわからない
叫びだしたくなる
『ぅぅう・・・ぅぅぅ』涙まみれでぐしょぬれになった顔。止まらない涙。鼻水。『ぼくは一体何がしたいんだろ？』
真衣さんを追いかけたのは真衣さんが心配だったから？
いや、違う。
ぼくがあの場で真衣さんを追いかけたのはあの場から立ち去りたかっただけだ。恐ろしかっただけだ。
何故？ぼくは孤独がいやなはずなのに・・・・
逃げ出したのは何故だろうか？
もう、その症状は治ったんだろうか？
『違う・・・よな』
あの願望屋の“トラウマ”の話。あれを聞くのが恐ろしかったから？

あの話を聞いたときに不意に想起した“大量の水”あれが原因なんだろうか？
問いかけてきた自分に何か関係あるのだろうか？
自問自答するが、答えは見つからない。
自分で見つけることはできないし
誰も答えてはくれない。
あたりまえ・・・か
『誰も、助けてはくれない・・・・。ぼくは・・・・・一人・・・・・』ひと言呟く。『“人によって人は救われない”・・・元々願望屋に頼ったぼくが馬鹿だったのかもしれないな・・・』
人によっては人は救われない。
もし、自分で解決できぬほどの悩みを抱えたら、悩みを解決できるようになるまで待つしかないのだ。これがぼくの出した結論だった。
『夾くん――――！！！』また、涙が溢れそうになって俯いたとき、誰かの声が聞こえた。『大丈夫？』
顔をあげると目の前には真衣さんがいた。体中ビショビショに濡れている。ぼくは嬉しかったのに思わず、『なんでここに？』と訊ねてしまった。
『君を探してたの・・・・』彼女は答えた。『何かの力になれればって思って』
『そうですか。でも――――もういいんです。力にならなくて』
何言ってるのだろう？ぼくは。
『え？』
『もういいんです。気付いちゃったんです。“人によって人は救われない”。人は常に一人で生きてるものだって。自分で如何にかしなければならないって。自分でできなかったらできるまで時を待つ。それでもできなかったら諦める！自分以外は誰も自分が求めたいものに気付くことはできないのだから。人に頼るという概念自体が間違っている、という事実に。』
『そうかもしれないけどね』優しい声だった。『少なくともさ。私

は違うと思うよ。人は一人では生きていけない。一人で生きていけるほど道筋がはっきりしていて強い人は殆ど居ない。支えあって生きてる。わからにところ、求めたいものがあったら人に訊ねてそれを解決して―――或いは明確にしてもらう。逆に訊ねられたら明確にしてあげたり、解決に導いてあげたりする。私たちは“解決に導いて上げる専門職”いわば案内人。正しい道筋に誘導してあげる役目なんだよ。勿論、実際にその希望を、求めたいものを、解決策を模索して見つけ出すのは夾くんだけど、どっちに行けばいいか迷ったときや悩んだときアドバイスしたり注意してあげるのが私たちなの。だからね。夾くん。一人だなんて思わないでよ・・・・』

彼女の眼から涙が出ていることにぼくは気付く。雨で少しわかりにくいけれど、紛れもなくそれは涙だった。

『真衣さんは・・・・・なんで、なんで―――そんなにぼくのために必死になれるんですか？他人のことなのに。』

『君と私が似てるからよ。』彼女はぼくに言った。『君と過去の私は境遇は違うけど凄く似てるから。ほっとけないの・・・』

『・・・・・・』

何故かわからなかったけれど、心が軽くなった、気がして、ぼくは倒れた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『そうですか。はい・・・はい・・ありがとうございます・・・』

藤沢秋は受話器を下ろした。ボ―ルペンで紙に文字を書き加える。

【ｄｒｏｗｎｉｎｇ　ａｃｃｉｄｅｎｔ―――水難事故―――】

＊第十八話　発見（後書き）

★遂に、次号最終場面（クライマックス）へ・・・・
少し短い？のかな・・・？
兎にも角にも、もう後数話で完結、
頑張ります！

＊第十九話　覚悟

もう、うんざりだ――――

同日、願望屋

夕暮れ時、私は神社で急に倒れた夾くんを抱え、願望屋を訪れた。

中に入ると藤沢秋はにやついた表情で安楽椅子に座っていた。

『夾くん、見つけたわよ。』私は秋に言った。

『なんだ？こいつ赤ちゃんかよ。真衣の胸で寝て。』

『そんなこといわないであげてよ。秋ちゃん。』私は夾くんをソファの上に寝かした。『この子、色々苦労しているみたいだから。私たちが思っていた以上に。理由はわからないけどさ』

『それなら調べ、ついてるよ』秋は私にホッチキスで留められた紙の束を投げた。『親に電話したら一発でわかったよ。この子（夾くん）が、昔、“水難事故”っつう物凄い外傷（トラウマ）体験抱えてたってことがね。』

『水難事故？』驚きのあまり私は問い返した。

『そう。彼の“願望”の原因には――――その根底にはやっぱりトラウマがあったんだ。』

『それって、どんな？』

『・・・五歳くらいの頃――――』

秋は話し始めた。

何回か私は相打ちを打ったけど、黙って彼の話を聞いた。

やがて、峠に話はさしかかった。

『――――その資料にも書いてある通り、夾くん。その頃には意識がなくてさ、すぐさま救急車に運ばれたらしいんだ。で、命がやばいってんで、緊急手術したらしいんだけど、川に流されている最中頭かどっかぶつけたみたいで記憶がなくなっていたらしいんだ。で、両親は水に怖がる様子もないし、無駄に思い出させて本人の負担に

なっても困るので本人には内緒にすることにした。でも、その事故以来夾くんが妙な行動をし始めた――――』

『妙な？』

『そう。“一人でいること”ができなくなったそうだ。寝るときは勿論、トイレに行ってるときまで。どんな些細なことでも。友達と遊ぶのさえ、友達が家に来てくれなければ小学校中学年くらいまではできなかったらしいよ。中学に入るとマシになって、“少なくとも両親の前では”そういった素振りを見せなくなったらしいけど、その代わりに自分が予想だにしていなかった出来事が起こると怯えるようになったそうだよ。』

『それって――――――？』私は愕然と、呟く。秋は首を縦に振った。

『叫びだしたやつじゃない。私の前で・・・』

どれくらい辛かったろう？

一人でいることは。

五歳という幼いときから、無意識のうちに、一人に孤独に怯えることは

そうとも知らず、私は――――私は――――

『セラピスト失格じゃない・・・・・』何故気付けなかったのだろう？自分と同じ境遇、そればかり気にしていた。涙腺が緩み、涙が溢れ出そうになった。

『う〝ぇっぐう〝ぇっぐ』

目の奥がじんわりと軋むようにか細く声をあげる。奥歯を噛み締めても呼吸をする度に肩が震えて声が出せない。不意に秋が遠く霞む。だめだ、このままじゃ――――――――。思いかけた所で目頭が熱く歪んだ。『真衣？』秋の声が聴こえた。その刹那、堪えかけたかと思った涙はあたしの頬を伝った。一瞬だった。声も出ない、下も向けないあたしは泣き崩れていた。泣く、というよりも嗚咽と言った方が正しいのかもしれなかった。どうしてもっと――――――――、思うだびに眠りに付いている彼の顔がだんだん見えなくなる。

“ごめんね・・・”

言葉を発しようと思ったけれどそれは泣きじゃくるあたしの口からは言葉にはならなかった。ただの汚い声だけが部屋に啜り泣くように響いて、あたしの五感を悪くする。気分が悪いのは
自分の声の所為だけじゃなくて――――――この声が彼に届かないまま、目の前の子供のような秋の耳に聴こえてしまっているからかもしれなかった。口元を手で覆う。それでも溢れ出る涙を止めることは出来なかった。悔しい。悔しい。悔しい・・・・・
願望屋に就職して私は何年になるのだろう？
セラピストになって何年になるのだろう？
私は。
未熟だった。
鷹を括っていた
逆上せていた
セラピストでいることに
安堵していた
秋の隣にいることに
セラピストであることに
『馬鹿――――私の・・・・馬鹿・・・・・』彼にどれだけ謝ったらいいのだろう？私は寝息を立てぐっすりと寝入っている彼を見た。また、涙が溢れ出した。『ごめんね・・・・・。夾くん』
『真衣。そんなに、病まなくてもいいんだよ。真衣は悪くないんだから。』泣きじゃくる私に秋が声をかけた。
『どうして？』私は尋ねた。『私が未熟だったの。鷹を括っていた。逆上せ上がっていた。この私を“悪い”以外にどう形容すればいいの？』
『別に――――』彼は何かいいかけた。
『私、セラピストやめるね。夾くん』
『違う。確かに真衣は鷹を括っていたかもしれないよ。逆上せ上がっていたかもしれない。でも――――、真衣は“セラピスト失格”なんかじゃない。』秋は私に言った。『どんな職業でも“失敗”はあ

るもの。医師だってそれは同じ。失敗を繰り返して人は学ぶ。』
涙が、止まった。
『それにさ。真衣にとっては夾くんは“患者”の一人かもしれないけど、夾くんにとっては五歳の頃から――もがき苦しんできた自分を助けてくれるメシアなんだ。真衣しかいないんだよ？』
“真衣しかいない”・・・か。
秋の言葉で私は悟る。
私は負けちゃいけない。
本当に辛いのは―患者さん（夾くん）なのだから。
私は逃げちゃいけない。
彼が逃げていないのだから
私は諦めちゃいけない
この道を選び、歩み続けると決めたのだから
私の口元が緩んだ。それを見て秋は言う。
『真衣、処方箋よろしくね。』
“願望を叶える”為の一つ一つのピースが一つ一つ一点に収斂していく。
これが“願望を叶え、人をも変える”願望屋藤沢秋の力か・・・・。
私は涙を拭った。『ええ。有り難う』

――――え？

なんだろうか？
不意に何かが頭を掠めた。
何か忘れていないだろうか？私は・・・・・・・
何か重要なことを。
頭をフル回転に回す。
出てきた言葉を。新堂夾に関連する言葉を脳内から紡ぎだし、繋ぐ
リストカット。平凡な日常。ナイフ。一人。外傷（トラウマ）体験。水難事故。
孤独。私と一緒。
私と一緒――――？似ている――――？
なら二重人格・・・？

不意に想起する。帰り際、私の分身、七瀬徹が言っていた言葉を。

『新堂夾の芽生えつつある二つ目の人格に気をつけろ。二重人格っ
てのは悪い奴といい奴がいて、簡単に言えば天使と悪魔なんだ。天
使は俺みたいに主（あるじ）の人格を助けるが、悪魔は違う。主を壊してしま
う。ときには人格や精神どころか魂――――人の命までもな。その侵
食方法は様々だが、一番内部から――――』

――――え？なんだろう？

彼は何と言っていただろう?私の分身、七瀬徹は。
思い出せ。私・・・・
思い出せ・・・

『内部から侵食し、壊しやすいのは夢だ。』

『夢――――?』私はソファに寝転がっている夾くんを見た。
私の背中に何かが奔った。悪夢の始まりだった――――。

＊第十九話　覚悟（後書き）

＊第十九話　嫉妬、前々から決めていたものでしたが、話が全然かみ合わないので真衣の覚悟にちなみ覚悟にしました。因みに次話は悪意膨張のつもり。時間かかります＞＜

＊第二十話（前）　対峙

何度目になるのだろう？
自分に訊ね、答えを得ようとしたのは。
あるときは、ここは何処？
あるときは、きみは誰？
またあるときは、ただぼくは何故？と訊ねた。
今回はそれのどれとでもあった。
何故であり何処でありいつであり誰なのか
彼に問いたかった。ぼくの目の前にたっている彼に。
今目の前にあるのは荒地。荒涼と形容すべき乾燥した地平線の果てまで何も見えない砂漠。
上にあるのは空。青くは、ない。けれでも黒でも鼠色でもなくて赤でも橙色でもなかった。
その中にポツンと一人ぼっちでたつ少年。ぼくと同じ背丈の、毎度ぼくの夢に出てくる少年。
何処か懐かしい感じがして、けれども触れることは彼に近づくことはなんだか怖くて躊躇してしまう。
彼とぼくは対峙していた。手を伸ばせば、届きそうな距離に彼はいた。
『こんにちは。』彼はペコリ、とお辞儀する。『ようこそ。“僕の元へ”』
ぼくは返事をしなかった。彼は迷わず続ける。『僕が誰だかわかった？』
ぼくは口を開いた。『ううん。全然。見当もつかないや。本当にぼくは君のことを知っているのかい？』
『・・・・・・』彼は少し躊躇した。そして、静かに澄んだ声で言う。『本当にわからないの？僕は君のことをこんなにも知っているのに』

『うん。ごめん・・・』
『君にね。僕は裏切られたんだ。君はもう覚えてないらしいけど。君にとって僕はそんなもんだったんだね。』
『きみの口からはきみの名前教えてくれないの？』ぼくは訊ねた。
『それは、嫌だな。できれば君の力でわかって欲しい。』彼は笑う。
『そうじゃないと、僕の気がすまないから。』
『じゃぁ、ここは何時か、何処かは――――そして、ここはいつだか教えてくれるよね？ぼくの棲む町とは随分違うようだけど。』
『そうだね。夾くん。君の言うとおりだよ。ここが何処だかは前にも言ったよね？“墓場”である、君の荒んだ心の中さ。』彼は言った。『いつ、かって？強いて言えば過去だろうな。君にとって僕の存在は“過去”でこそあって“未来”でも“現在”でもないんだから。』
ぼくは、頭をフル回転させた。誰だろうか？
幼馴染。幼稚園の友達。小学校の友達。中学校の友達。親類のお兄さん。従兄弟。近くに住むお兄さん・・・・
誰だだろう？ぼくが昔裏切ったひと。心に刻まれるほどひどい裏切りをしたひとは。
『まだ、気付かないの？ぼくはこんなにもヒントを言ってあげているのに。まだ、わからないの？僕が“なにもの”なのか。君の“何”であるのか。』彼の声は次第に大きくなり、眼は見えなかったけど泣いているようにも感じた。
『やっぱり、きみにはぼくの声は届かないんだね。哀しいな。』彼は続ける。『ぼくは、君が思っているような人じゃない。君が最も身近に感じている人よりも更に身近にいて君のお母さんよりも君の親友よりも君の
ことをよく知っているのにな。』
ぼくはハッと自分の間違いにようやく気付いた。彼はぼくの何かじゃないだろうか？
『ぼくの・・・こころ？』

『ううん。だいぶ近くなったけどちょっと違うな。でも――――もう、いいや。うん。夾くんも焦れったいよね。』彼は一呼吸おく。『――――僕は。ぼくは――――。君自身。君が捨てた――――君に裏切られた感情。“恐れ”を背負わされ、その感情ごと君に埋められた――――君の心にしまい込まれた第二の人格さ。』

＊第二十話（前）　対峙（後書き）

非常に短いですが、僕個人としては最後の部分で一度切ってから次の部分に進みたかったので一話を二部に分けました。後半部分は予定通りサブタイトルは“暴走”でいくつもりです。
↓変更します。次の話はアイデンティティ―か――――の予定。話数は二十三で完結すると思います。１２／１３蓮宮志奈多

＊第二十話（後）　フラッシュバック

死ね。失せろ。消えちまえ。

――――ここは暗い奥底。誰もいなくて真っ暗な場所。
淋しくて。悲しくて。孤独で。恨みたくて。恨めなくて。憎しんでいた。
主（あるじ）を。新堂夾を。
与えられた名もない自分。気付いたとき、“僕”は、“新堂夾”という心の奥底にいた。
“第二の人格”として、作られた後その出来損ない残骸に“恐れ”という感情を背負わされ僕は彼の心の奥底に埋められた。
僕は彼を知らない。けれども彼は僕自身であるのだ。
自分を捜し求めやっと自分自身にたどり着いた先、――――自分のアイデンティティを見つけた後、幾度声を張り上げようが、何度彼の名前を呼ぼうが、何度彼に尽くそうが、自分という存在が自分自身に気付かれないことがどれだけ淋しかったか孤独だったか彼にわかるはずもないだろう
。
いつしか淋しさは、その孤独は憎しみへと変貌を遂げていたのに僕は気付く。
『もう、うんざりだよ・・・・・・』

＊

『ぼくの恐怖を背負った二重人格・・・・・・？』
何を言っているんだろうか？この男は。
『そうだよ。』彼は言った。『僕は名もなき二重人格。作られた挙句、恐怖という感情を背負わされて抹消された、ね。』
懐かしい感じはそのため。

触れることは容易くとも躊躇してしまうのはそのため。
『俺はお前なんて知らない。』ぼくは強く言った。『お前なんて知らない。』
そうだ。ぼくはこんなやつ知らない。
これは夢だ。質の悪い夢。
眼が覚めたら嗚呼怖かったってことで終わるだろう。
それまでの辛抱だ・・・・・・。
『知らない？そんなはずないよ？』彼はぼくの眼を見ていう。『君は――――新堂夾という名の君は確かに僕を生み出した。必要とした。』
『ない！ない！そんなことなんてない！ありえない。』僕は強く言った。『大体、“仮に”二重人格であるきみをぼくが生み出したとして、“ぼくがきみの存在を知らないこと”が何故問題になるんだ。』
『君は僕を生み出した後、僕の存在を消した。無責任にも。君はぼくの存在を知っていたんだ。そして、意図的に抹消した。だから僕は名前さえわからないままだ。』
『仮に、君が言っている仮説が正く、ぼくがきみを“無責任にも名前さえ与えずに消したなら、抹消したなら、何故きみが生き残っている？』
『君の奥底に深層心理に、いたからだよ。』
『なら、何故記憶が・・・・・』
不意に何かが――――ぼくの脳裏をよぎった。
『なら、見せてあげるよ。君が“僕”という存在を生み出した瞬間をね。』
ぼくの体は薄っすらと消えてゆく。
次第に世界が歪み、荒れ果てた荒涼は川へと森へと橋へと形を変える。

『ああああああああああああああああああああああああああああああああああああ――――――――――』

記憶が、記憶が――――フラッシュバックした。

＊第二十話（後）　フラッシュバック（後書き）

次話は、過ぎ去りし過去の傷跡。へ

尚、今回・願望ファイルと覚悟の一部分を変更させていただきました。

＊第二十一話　過ぎ去りし過去の傷跡

完全に忘却するのは記憶するより難しい

十年前――五月五日
その日は、雲ひとつない青空だった。
“シーンっと静まり返る新緑の世界で心を落ち着かせませんか？”
郵便ポストに入っていたそんなキャッチコピーを掲げた、岳山のパンフレットに心を魅かれ、癒しを求めぼくの父さんはハイキングにこの地選んだ。近場だったし、妹も生まれたばかりだったので母さんも賛成した。
『ねぇ、ママ。あれなぁに？』空を駆ける鳥をさしてぼくは訊ねた。
『ん？』
『あれ、あれ。あれなぁに？』
淡いようなべージュの――母さんにとてもよく似合う――上着の裾を右手でぐいぐい引っ張りながら遠くの方回る何かを指差した
『鳥さんのこと？』
『うん、そうあれ何てお名前？』
母さんの顔を覗き込みながら、返事を待った。
少し嬉しそう、でも何か遠くを見るように笑う。
その屈託の無い笑顔が眩しくてその顔がとても好きだった――
『鳶っていうのよ、夾くん』
『とんび？』
母さんはぼくの手を引いて『うん、そうよ』と短く言った。
そして、何か気付いたように立ち止まってぼくの好きなあの顔でまた笑った。
『耳、澄ましてみようか』
『え？』
母さんは目を閉じて薄く笑いながら手を耳にかざす。

でも次の瞬間ぽかんとして見ていた僕を見て笑いながら言った
『ほら、夾くんもはやく』
目を閉じて
『う、うん・・・』
子供みたいにはしゃぐ母さんにおずおずと瞳を閉じる
微かに届いた音は耳の中で綺麗な旋律を奏でた。
ピーヒョロロロロ…ピーヒョロロロロ…
『――聞こえた？』
あの笑顔で、母さんは笑う。
『うんっ』
もう一度、空を仰ぐ
回る何かは母さんの歩調に合わせて見えなくなった
少し嬉しそう、でも何か遠くを見るように笑う
その屈託の無い笑顔が眩しくて
その顔がとても好きだった――
歩いていると、何だか気分がうきうきしてきて幼稚園で習った歌の歌詞を思い出した。
ぼくは今度は父さんの元に近寄り、母さんのような屈託のない笑みを浮かべた。
『パパ、ぼく幼稚園でお歌習ったんだよ。』
『そうか・・・』
父さんは疲れたような顔をしていたのに、ぼくは気付かなかった。
『“さんぽ”って、お歌なんだけどね――』
傾斜は少しずつ緩やかになっていた。ぼくが“さんぽ”を歌い終えた頃、ぼくたちは開けた河原に着いた。
『少し休もうか。』父さんは笑顔を見せず無愛想に言った。そして、手に持っていたパンフレットに眼を落とす。『ここは、水蛇（すいじゃ）河原っていうんだそうだ。此の地に伝わる昔話もあって地域住民には神聖なる場所として、“水蛇様の河原”呼ばれているみたい。』
『だってさ。夾くん、汚しちゃ駄目だよ？』

『うん！ねぇ、ママ、シンセイナルバショってなぁに？』
『神様がいる場所のことよ。ほら、向こう岸を見てごらん？』
母さんに促され向こう岸を見ると小さな社（やしろ）が目に入った。
『あそこが、スイジャサマのお家なの？』ぼくは社を指して母さんに訊ねた。
『うん。』母さんは頷いた。『そうだよ。あそこが神様が祭ってある場所。水蛇様のお家だよ。』
『そうなんだ。ねぇ、遊んできていい？ママ』
『いいわよ。でも、神様のお家に触れちゃ駄目よ。』
『なんで？』
『向こう岸に渡らなければならないし、お家を触られたら神様も嫌がると思うから』
『そっか～。じゃぁ、ママも一緒に着て。』
『それはできないわ。私は美奈ちゃん見なきゃいけないから。ごめんね。夾くん。でも、夾くんもうお兄ちゃんでしょ？』母さんはぼくのしゃがみこみ頬に触れた。
『うん。ぼくお兄ちゃんだよ。一人で遊べるよ。』
『よし、いい子。じゃぁ、いってらっしゃい。あんまり遠くへ行かないようにね』母さんはぼくの背中を軽く押した。
『うん』ぼくはまた頷いた。

岳山は別名桜山とも呼ばれ、標高１０００Ｍほどの休火山で富士山に似た成層火山である。生えている木々の大半が広葉樹林で桜の季節になると花見客が多く訪れ、新盛市の一大観光スポットでもあった。また、山の斜面を流れる礒辺川は、魚たちが数多く棲む綺麗な川として知られていて、山の七合目と八合目の間ほどにある巨大な滝（名前は付けられていない）が春に水を落とすその様は江戸時代のかの大詩人も絶景と褒め称えるほどだったという。
何故、滝がその場所にあるかといえば、七合目辺りから急勾配になっているからで、“水蛇様の河原”があるここは丁度、十合目辺

りから落ちてくる水が滝を下りストンと落ちる流が急な場所であった。昔話も急な川の流れに足をとられた青年がこの地で称えられている水の神様、“水蛇様”に助けられたという事実か嘘かわからぬ話から派生していた。

『ねぇ、パパ。危ないかしら、夾くん、一人にしたら。』父さんに借りたパンフレットの文章を見て母さんは言った。『詳しくは載ってないけど、川の流れ急そうだし・・・』

『心配ないだろ？水蛇様が見守ってくださっているんだから』お父さんは無愛想に答えた。『それよりママ、あのこと考えてくれたかい？』

『私は嫌よ。離婚なんて。』母さんは言った。『夾に――――それにこの子になんと言ったらいいの？』

母さんは美菜の頭を撫ぜた。

『夾にはぼくが納得させるさ。』

『でも――――』

『本当は俺だっていやさ。でも――――俺がいると、金を喰うだけだろう？』

『そうかもしれないけど――――』母さんは言った。いつのまにか声が大きくなっていた。『美菜は？美菜は生まれたばかりじゃない。』

彼は――――こんな子にまで淋しい思いをさせようとしているのだろうか？

『美菜は元気だ。これといって病気を抱えているわけでもない。俺がいなくても一人で生きていけるさ。』

『答えになってないわ。』

『とにかく――――もう、決めたことなんだ。あとは、きみが認めてくれればいい。』

不意に水が頬をうった。涙かと思った。

『パ・・・・――――』

轟音が母さんの声に重なるように鳴り響いた。母さんの頬に大粒の

水滴が流れ落ちた。
『・・・え?』思わず母さんは後ろに振り向く。『夾!』
母さんはぼくの名前を叫んだ。

再び、水が頬をうった。
母さんの目からは大粒の涙と、天から降り注ぐ大粒の雨が流れ落ちた。

＊第二十一話　過ぎ去りし過去の傷跡（後書き）

中途半端ですかね？
次号・＊第二十二話　予期せぬ裏切りデス。
予想ＧＵＹですが、完結するまであと一万文字ぐらいいきそうです。
あと、３・４話あるのかな？
次かその次にはまた、真衣さんたちが出てくるのでお楽しみに。

＊第二十二話　崩壊

コポコポコポコポ・・・・・

コポコポコポコポ・・・・・

コポコポコポコポ・・・・・

ここは――――何処？

ぼくは、自問自答した。必死に今何をしているか思い出そうとして、止めた。

不意に自分が今どのような状況にいるか理解したからだ。

水の中だ。

そう、ここは水の中。大雨が降ってきて、ぼくは落雷に打たれ――――川に落ちた。気絶したぼくは急流に飲み込まれた。

ぼくは死んでしまうのだろうか？

不意にそんな不安がこみ上げた。

死んだら何処に行くのだろう？そういえば、父さんが言ってたっけ。

『ヒトは皆何れ死ぬんだ。夾――――。善いヒトは天国へ。悪いヒトは地獄へ連れて行かれてしまうんだ。夾、悪い子になってちゃ駄目だよ？』

『いやだよ。ぼく、悪い子になっちゃうもんね――――。』

『駄目だよ。夾。死んだら閻魔大王様のもとに行くんだ。閻魔大王様はどんな嘘でも見抜いちゃうんだから。』

『え――――！？』

コポコポコポコポ・・・・・

ぼくの体は急流に飲み込まれ深く深く沈んでゆく。

『！？』
急に苦しくなって、我にかえって眼を開く。ぼくの体のいたるところから血が出ていた。
『ボガッッッッ！！』
水を大量に飲み込み吐き出した。手元の岩に捕まろうとしたが、滑った。
ぼくはぐんぐんぐんぐん流されていく。
冷たっっっ！！我に返った拍子に感覚が戻ったようだ。
草を掴もう。小学校に入る前の幼稚な手で岸辺に生い茂る草を掴んだ。また、手が滑って掴み損ねる。しかも、今度は性質の悪いことに腕が折れた。
あまりの痛さに涙が溢れてきた。
『ボガッッッッっ！！』
また、水が大量に押し寄せてきた。手を傷めないように、顔を、水の上から出そうとしたが、うまくできない。幾ら水を吐き出してもどんどん体の中に入っていった。
また、岩にぶつかった。あまりの痛さと、五月とはいえ水の寒さに体が麻痺しているようだ。
不意に大量の泥水が押し寄せてきた。
おぼれる――――！！！
『タスケテ。タスケテヨ――――ママ・パパ――――誰でもいいから。お願い・・・・！！！』
辛うじて酸素を吸うために口を上げた瞬間、横に父さんが見えた。
『と・・・・・・とぉさん・・んふぁ・・・ぼはっっっ・・・・・たす・・・・ケテ・・・』
彼はぼくを見下ろした。何も言わなかった。
『たすけて。たすけてよ。たすけてってば！！！！お父さん！！！！』
彼の睨みつけるような視線を最後にして、ぼくは記憶を失った。

あれが本当に父さんだったかなんてぼくは聞かなかった。
聞くのが怖かったから。本当のことを聞きたくなかったから。
次の日、母さんがぼくの看病をしている間に父は失踪した。

＊

ふと、我に返る。
そうだよ。思い出した。裏切ったのはボクじゃない。
父さんが――――親父が裏切ったんだ。
ぼくのことを。美菜のことを。母さん――――お袋のことを。
あいつは俺のことを助けなかった。
ぼくに何も言わず、それどころかお袋にだって何も言わず、あいつは、あいつは――――自殺したんだ！！
不意に、怒りがこみ上げた。
『どうだった？』もう一人の僕。名前すら与えてられていないと自称する“彼”が言った。『過去へのたびは。懐かしかったでしょ？』
彼はクスクス笑い、ぼくに近づいた。
『てめぇ！！』
ぼくの腕を間一髪で、彼はゆらりとかわすと『危ないなぁ。もう・・・』とまた笑った。
『で、裏切った自覚はもどった？』
『裏切ったのはぼくじゃない。親父だ！』
自殺したあいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪い・・・・
心の中で唱える。何回も頭の中を埋め尽くすようにぼくは唱えた。
冷静になれ。夾。こいつに騙されるな。まるめこまれるな。考えろ。
今のシーンに、父親が裏切った事象は確かにあった。しかし、この“自称”、ぼくの二重人格が生み出された理由はなかったぞ。
『ぼくは、お前なんて生み出した覚えはないぞ。』思ったことが口をついて出た。
『覚えてない？ほんとに？』彼はクスクス笑った。『あの後、大変だったんだよ？お前の――――つまり僕のお母さんは何もなかったな

んていってるけど、実は二日三日お前は喚いたんだよ。父さんがぼくを裏切ったっったってヒステリックにね。』
『そんなことしてない！！！』
『おっとっっ、怒らない怒らない。』彼はぼくの目の前に手を平を向けた。『そこだよ。“夾くん”？キミは、そこで“僕”という強い人格を作り出したんだよ。自身の精神を守るためにね。所謂、二重人格の誕生だよ。ところが――――問題が起こった。』
『――――そんなこと・・・』
『そう、問題だよ。夾くん。』彼は構わず続けた。『“僕”という存在と“父親の裏切り”っていう事象を認めたくないキミは僕と“裏切り”の摘出を図った。キミはまさに天才だよ。精神力で言えばね。まぁ、二重人格として現れた僕の人格も“キミと同い年”で幼かったし、君自身もはっきりと、裏切りの事象を覚えていなかったから僕たちは心の奥深くへと閉じ込められた。』
沈黙が流れた。やがて、彼が再び口を開いた。
『長い間待ったよ。裏切りの記憶しかない僕は。キミのことをね。信じてたから。ほとぼりが冷めたらいつか救済してくれるって。けれど、キミは僕の存在を記憶から抹消した。僕は何度も君にエ―ル送ったの気付いてたよね？あれから、キミは岳山に行っていないみたいだからキミの一番身近な通学路で、僕は泣いてみたり、救済のエ―ルを文字で表したりした。』
不意に、願望屋へ来たとき、見覚えのある感じがした瞬間があったのを思い出した。
『ぼくは、きみを裏切ったつもりはないんだ。』
本当は薄々勘付いていたのかもしれない。
自分の中に何かがあるって。
自分でない何か。
懐かしい何かが。
足りない何かが。
けれどもぼくは追及することを恐れた。

彼の正体を。
知ることを恐れた。
認めることを恐れた。
でもそれはわざとじゃない。
意図したわけではない。
『それ、言い訳？』彼は少し悲しそうな顔をした。『ずっと前から気付いてたくせに』
『そんな・・・政治家じゃないんだから・・・』
『ううん』彼は首を振った。『キミは政治家と一緒。あの醜く、この世で一番糞ったれの政治家たちと一緒だよ。見てみないふりをしてた。』
彼の言葉に、ぼくは何も言い返せない。
論理を打ち崩せない。全てが図星。全てが正論だった。
ぼくのセイシンは狼狽した。

自殺したあいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪い・・・・
ぼくは悪くない、悪くない。悪くない。

ぼくは混沌の淵へと追いやられる。
ぼくのひ弱な硝子の精神が、崩壊する―――カウントが始まった。

＊第二十二話　崩壊（後書き）

一番長かった回かもしれません。
次は予期せぬ展開になりそうです！
また＊第二十二話　予期せぬ裏切り→崩壊にした理由は、父親の裏切りのシーンが殆どかかれていなかったからです。
ところで、ずいぶん前から後数話後数話と公言しているのですが、色々と不具合が生じまして、今のところ第二十三～二十五話までが決まっています。（二十五話はエピローグです。）タイトルもネタバレになってしまうので明かせませんが、出来上がっています。
また、二十四話のタイトルは、第二～三話辺りから“最後には出すぞ”と決めていたものでその辺は変動はないと思います。
それでは、読んでくださっている皆さん。
物語はいよいよ佳境に差し掛かってまいりました。
果たして、夾君の運命は？
だいどんでんがえし（死語）はあるのか？
鬱陶しいかもしれませんがもう暫し、夾くんたちを見守っていてください。＞＜

＊第二十三話　助舟

『夢――――？』私はソファに寝転がっている夾くんを見た。
私の背中に何かが奔った。
『夾くん！？』私は無意識に彼の体を揺さぶった。何も反応はない。
彼は安らかな寝息を立てて眠っていた。
『どうしたの？真衣。』秋は尋ねた。『夾くんはそっとしといてあげなよ。疲れて寝ちゃってるんだから。謝るのは後でいいでしょ？』
『ちっっ、違うの。』私は目に浮かぶ涙を必死に堪えた。『そんなんじゃないの。』
私は、言葉を――――粘々していてなかなか吐き出せない言葉を摘み出して言葉を繋げる。
『そんなんじゃなくて――――、夾くんはニジュウジンカクで――――その――――夢に侵食して――――・・・』
支離滅裂な言葉の羅列だった。できるだけはやく秋に夾くんに危機が迫っていることを伝えようとして益々、文章が狂う。
『まって――――ね？真衣。落ち着いて、ね？』秋は私の肩に触れ私に言い聞かす。私は少し落ち着いた。
『あい・・・』涙声で私は頷く。秋は、溜息をついた。
『どうしたの？真衣。焦らなくてもいいから言ってみて。』
私はゆっくりと口を開いた。そして、願望屋、藤沢秋にことの顛末を告げた。

『う～ん』藤沢秋は腕を組んで呟く。『まずいね。』
『とにかく起こさなきゃ・・・』私は、夾くんの体に触れた。夾くんの体温が掌に伝わった。
『まって。本当に、君の二つ目の人格“七瀬徹”はそう言ってたの？』
『ええ』私は頷いた。『私と人格を交代するときにね。精神世界で

彼は確かに言ったわ。』
内部から侵食し、壊しやすいのは夢である
彼は確かにそういった。
新堂夾の芽生えつつある、二つ目の人格に気をつけろ、と。
滅多に現れない彼が
滅多に私に話しかけない彼が
常に楽観的な彼が
あのときだけはそう言った。
いままで、私に忠告したことなどなかったのに
いままで、他人のことについて触れたこともなかったのに
そう言った
いままで、私が辛い理由以外で出てきたことなかった彼が、だ。
『ふ～ん』秋は暫く考え込んでいたがやがて口を開いた。『うん。
とりあえず、起こすことが先決だね。』

＊

自殺したあいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪
い・・・・
ぼくは悪くない、悪くない。悪くない。
あいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪い。あいつが悪い・・・・
ぼくは悪くない、悪くない。悪くない。

何度も、何度も、繰り返す。心の中で、その言葉を。
狼狽した眼で、ぼくは彼を見つめた。
何も言い返してやる言葉が浮かんでこなかった。
『何も言い返せないみたいだね。』彼は笑う。『まぁ、当然だろう
ね。事実なのだから』
次第に、彼の声は刺々しく、荒々しくなっていく。
『へぇ、見てみないふりをずるズルっ子はシカトもするんだ』ぼく
は何か言おうと思ったが口が開かなかった。彼は尚も続ける。ぼく
を罵倒する。『都合が悪くなったらすぐこれだ。やっぱり政治家達

と同じだよ。あの腐った大人たちとね。まぁ、僕はきみの“せい”で“現実世界のこと”をあまり知らないから――――殆ど情報が入ってこないから――――詳しいことはわかんないけどね。だから、僕から言わしてもらえば、きみのほうが腐ってる。』

『ぼくは――――』

『アーアー、何度も聞き飽きたさ。言い訳なんて。わざとじゃない？意図したわけじゃない？裏切ったつもりはない？知らなかった？』

彼は一瞬、言葉をとめた。

『嫉妬が、憎悪が、安心が、不安が、感謝が、驚愕が、冷静が、焦燥が、名誉が、　尊敬が、親近感が、憧憬が、欲望が、勇気が、快感が、後悔が、不満が、無念が、嫌悪が、羞恥が、軽蔑が、期待が、優越感が、劣等感が、怨みが、苦しみが、　悲しみが、怒りが、諦念が、絶望が、愛しさが、幸福や幸運が、あらゆる感情が、恐怖以外のあらゆる感情が欠如している僕の気持ちを君は考えたことあるか？ずっと孤独。けれど、その形容は恐怖でしかなく、恐怖からはじまり、恐怖で続く恐怖を。

わからないよね？きみは、僕を生み出して以来、“恐怖”を僕という人格（はこ）にしまいこんでたんだから。』

『ぼくは――――』

『え？何いってるの？聞こえないよ・・？』彼は、耳に手をあて、ぼくに尋ねた。

ワルイノハボクジャナイ、ワルイノハボクジャ・・・

ぼくは、口を開こうと思った。大声で叫びたかった。あいつに向かって言いたかった。たとえ、あいつがそれを言い訳と言ったとしても、関係なく、叫びたかった。

『え・・・・』

口を開こうとしたその刹那、突然視界が反転した。“僕”の体が中央から裂け、真っ白くなってゆく。

彼は何か言っていたが声にノイズがかかり、次第に小さく聞こえなくなっていった。

気付いたとき、真衣さんの顔が見えた。

＊第二十三話　助舟（後書き）

すいません。
今、推敲中です。
現在、第参話まで推敲を終えました。
暫くの間、更新は滞ってますが、この話は絶対完結させてみせます！！！

～仮決定　サブタイトル一覧～
＊第二十四話　診察
＊第二十五話　“秘密です”（これは内緒です。ネタバレなんで）
＊第二十六話　決意を胸に
＊第二十七話　～ｌａｓｔ　ｓｔｏｒｙ～　――新堂夾の手記より
この後に、付録を二つと、アトガキを添えて完結させるつもりなんでよろしくお願いします。

＊第二十四話　暗示

七瀬真衣の二つ目の人格、“七瀬徹”とぼくこと新堂夾の二つ目の人格、“僕”。
現実には存在すべきでない人格。
人間の弱さ故に生まれた人格。
徹は、真衣の精神を支える役目を背負い、僕はぼくのかわりに恐怖を背負った。
二人とも、目的は同じ。
主の助け。
しかし、その背負わされた感情故か、役目故か、“僕”は狂った。
ぼく“新堂夾”の狂いを直すべく生み出された人格が狂った。
恐怖しか感じられない故に。他の感情が一切無い故に。
狂って、狂って、狂った故に尚、狂った。
それが、二つ目の人格“僕”の人格さえも変えたのは紛れも無い事実だった。

『う・・・・ぅ・・ぅぅう』
低い唸り声を上げ、ぼくは目を覚ました。酷い疲労感が体を襲った。
ここはどこだろうか?、瞳孔を開くと、目の前に美しい女性が見えた。
『気付いた!?』
突然、その女性が抱きついてきた。よく見ると、真衣さんだ。ぼくは、顔が熱くなった。
『真衣さん!?』ぼくは、言うと真衣さんを体から退けた。よく見ると眼が少し潤んでいる。『どうしたんですか?急に』
『よかった・・・』
ぼくは何もわからなかった。
何故か彼女の眼からは涙が零れ落ちた。

吃驚仰天。否、驚愕か。慄然か。
とにかく、驚いたのは事実。
真衣さんたちに事の顛末――“夢の僕”について聞かされたぼくは、唖然としてなんと答えていいかわからなかった。
だから、『あいつは、きみの二重人格だ。』なんて言われてもぼくはピンとこなかった。
『それって、やばいことなんですか？』ぼくは訊ねた。
『よく、そんな楽観的にいられるね。夾くん。』願望屋はぼくを諭すように答えた。『人格が喰われるってことは“きみ”即ち、新堂夾という存在が、心がなくなってしまうってことなんだよ。――空虚。今までよりも遥かに酷い、残酷な空虚ってことなんだよ？』
『それもいいんじゃないですか？』半分諦め気味にぼくは答えた。楽に慣れるなら何でも良かったからだ。『死にたいとは思わないけど。何も全て痛みも無く、自分という“存在”がなくなるのならかまわない、です。』
虚ろだった。何もかも虚ろに見えた。
時間が過ぎるごとに。世界が鮮明では無くなっていくのがわかる――
これが“侵食”という事象。“人格が喰われる”っていう事象なのだろうか？
『本気かい？』
『本気・・・です。』
ぼくはゆっくりと答えた。
思考力まで失われていくような気がする。
深く深く――
暗闇に紛れ込んでいくような気がする――
遠く、遠く――
何処かに自分という存在が行ってしまいそうになる気がする――
『夾くん！』ぼくは、突然呼ばれた気がして後ろを振り向く。真衣

さんだ。虚ろな眼でぼくは彼女を見つめた。『大丈夫？』
『だい・・・じょうぶ・・・です。』
何もかもどうでもいいような気がしてきた。
体が口が、枝葉末節が誰かに――――何かに侵食されていくのがわかる疲労感が体を襲った。
『まずいね――――』
願望屋の声が聞こえた――――。
その言葉を最後にぼくは再び気を失った。

『夾――――くん？』私は目を疑った。『大丈夫？大丈夫なの・・・・・？ねぇ、夾くん。返事してよ。ねぇ・・ってば！！！』
『・・・・・』
『ねぇ、夾くん――――！！』彼から返事は聞こえない。私は秋を見た。
『――――侵食されてるみたいだね。彼の心。』
『そんな、呑気なことといってていいの？秋――――。夾くん死んじゃうよ？、夾くんこのままだと心がなくなっちゃうんでしょ？心が空虚になっちゃうんでしょ？』
『そうだね』彼はゆっくりと答えた。『この性質（たち）の悪い“二重人格”はこの子（夾くん）を侵略するのではなく、破壊するつもりだろうからね。』
『破壊・・・？』
『そう。破壊。破滅の破に、壊すと書く、あの“破壊”さ。』
『そんな！！！』
『まぁ、焦るなって――――夾くんなら大丈夫だよ。』彼は微笑を浮かべた。『ぼくが、念の為を思ってかけた、催眠暗示がかかってるはずだからね』

＊第二十四話　暗示（後書き）

次号。クライマックス！！！

＊～climax of the story～ この世にある限り何れ、全て

彼を見て。
思い出した。
鮮明に。鮮烈に。鮮やかに。綺麗に。一字一句。

“悪夢への対処法”
――――最初の頃に教えてもらった。
それとなく。記憶の奥底に置き忘れるほどにさり気なく。
彼は言った。
『一番の方法は“それが夢だと自覚する”こと。“まやかし”であると“幻”であると気づくこと』
彼は不適に笑いぼくに言った。

今、ぼくはこれが夢であることを自覚している。金縛りにあったように眼を覚ますことは不可能だけれど。
だから、ぼくはもう彼には負けない――――

ヒュウ――――
風の音が聞こえた。
気づけばそこは、あの荒涼地帯。乾いて荒れ果てたぼくの心――――
“僕”の住処だった。

＊

『突然、いなくなるなんて吃驚したよ。“夾くん（ぼく）”――――』
彼は笑いながらぼくに言う。
しかし、何処か彼の顔には曇りが見える。彼の顔は残念そうしも見えた。
彼はさらに続けた。

『出れないように工夫したはずなんだけどね。きみの意思を反映させないようにするために。ぼくと向き合ってもらうために。』
そして、あっ、とわざとらしく気づいたように付け加えた。
『そっか。誰かがきみを無理やり起こしたんだね。』
『ぼくはもう、きみには負けないよ。』
『知ってるよ。』彼は呆れたように言った。『夾くん（ぼく）、君の事は何でもわかる。特に最近はきみの感情まで。自分が経験しているかのように、わかる。きみ以上にね。』
『だから、残念だ。』
『え？』
彼は尚も続ける。
『残念だよ。新堂夾（ぼく）。』
口を閉ざさない。ぼくを揺るがすように、ぼくの心を揺さぶるように、躊躇わすように彼は只管言葉を繋ぐ。何故か急くように、罵倒する。
『お前は――――』やっとこさぼくは口を開く。『ぼくを壊せない。』
『そうだね。』
『え・・・？』
予想外の言葉にぼくはたじろく。
彼は、そわそわと青くない空を見つめた。
『でも。それも・・・果たせなかったみたいだね。さっきだったら、良かったのに。さっきがギリギリの時間だった。ギリギリで、一番危なくて一番最大のチャンスだった。』
彼は不意に残念そうに笑った。
『え？』
『悪いね。』彼は不適に笑う。『もう遅い。きみとは遊んでられないよ。時間みたいだ。』
『時間・・・？』ぼくは訊ねた。
『そう、時間。終焉のとき、さ。僕はもうすぐ、新堂夾（きみ）の世界から

消えてゆくのさ。』
『それって――――・・・』
“死”だよ。刻一刻と、刻一刻と迫ってるのを感じるんだ。』
彼の体が薄くなっていく、ような気がした。
『僕は直に死ぬ。感じるんだ。唯の人格で肉体すら与えられてない僕がいうのもなんだけど、体がどんどん蝕まれてるのがわかる。きみに放って置かれたから、きみが恐怖という感情を取り戻そうとしたから、僕の存在意義はなくなった――――』
ぼくを彼は睨んだ。
最後――――。嬉しいはずなのに何故か哀しい余韻が残る。
意を決してぼくは訊ねる。
『きみは――――何故、ぼくを壊そうとしたんだ？』
『別に。』彼は答えた。『嫉妬。憎悪。そんな感情、嘗てはあったけど、今じゃ何も無い。恨みさえも消え失せてる。まして、酔狂なわけでもない。』
『じゃぁ――――――何故・・？』
『願望だよ。“願望”。破壊願望。新堂(きみ)夾を壊したいという復讐という感情にもならない、唯の願望。別に、理由なんてない。強いて言えば“悔しいから”だろう。過去の“僕”への唯一できること、とでも言うかもしれない。』
彼は呟くように、自分に言い聞かすように呟く。
『もうきみには恨みなんてない。憎悪だって、嫉妬だって、ない。けど――――悔しいんだ。きみが何食わぬ顔で生きてゆくのが。これから歩んでいくのが。』
風が吹く。
荒涼地帯に。
同時に彼の体が一段と透明になっていくのが確信を持ち、わかった。
『知らせておきたかった。』彼は微かに笑う。『僕の体が消滅する前に。』
彼の息が荒くなっていく。

荒い呼吸がぼくの耳まで届く。
まるで、今にも死にそうな人間のように。肉体を持つ人間と同じように、彼の呼吸は生々しかった。
彼の“死”はもう間近だった。
『でも、無理だったよ。きみの勝ちだ。』彼は苦笑した。
『ほかにもう、質問しときたいことは？』突然、彼はぼくに言った。
『最後くらい、デレってしてやるよ。新堂夾。』
その言葉に。
焦らず、ゆっくりと。
自分の意識を確認しながら。
言葉を選びながら。
ぼくは最後に言いたかったことを告げる。
『僕。ごめんね。』
その瞬間だった。
まるで、ぼくの心が、狂ったように上下左右がアベコベになる。
空は波紋を描き、渦を巻いて雷鳴を呼び起こし、荒涼に降り注いだ。
そんな中、彼はぼくに笑みを見せた。
それは、今までで初めて彼が見せた本当の笑顔なような気がした――。

そして、突然、時は、止まったような気がした。
長い長い、一瞬だった。

『時間だ。』

『さよなら、ぼく（ぼく）――――――――――』
僕は勝ち誇ったように、ゆっくりと、ぼくに告げた。

彼の笑いがぼくの笑いに重なって――――
気づく。
彼は――――
“僕”は――――
“ぼく”であると
“ぼく”自身であると
ぼくはやっと気づいた。
彼が消え往くその刹那、ぼくは彼に向かって走り出す。
僕、いやぼくへと。
ぼくは走り出す。
ぼくの指先が彼に触れた。その刹那、彼の体は光を放ち・・・・・

＊～climax of the story～ この世にある限り何れ、全て

～climax of the story～です。
＊第二十六話完成いたしました。
全部で二十七話構成の予定です。
数週間以内に更新いたします。
また、全部、印刷してみたところ、数多くのところで問題点、矛盾点を発見いたしましのので、随時勝手に変えさせていただきますので、ご了承ください。

＊第二十五話　ごめんなさい

ほんとうは。
僕はぼくだってわかっていたはずだ。
けれど、ぼくは認めたくなくて、僕は“ぼく”に歩み寄ろうとしていたのに、突っぱねて否定して、
はじめは嫉妬だった感情を、憎悪に、悔いに増長させて、そこでまたその存在を否定した。
最悪の行為。
最低の行為。
彼は、“僕”は、ぼくの壊れた感情を背負い、ずっと歩んでいてくれたのに。
なんて、滑稽な話であろう。
なんて、酷い話であろう。
なんて、醜い話であろう。

ごめんね。僕――――
謝って済む話ではないけれど、とにかくぼくは今、そう言いたかった・・・

＊

あれから、何分たっただろうか？
十分？二十分？いや、もっとか。
夾くんは眼を開いた。
すっ、と。
彼はあっけなく瞼を開いた。
今まで起きてました、というように
瞳孔から涙を流して。
『おはよう。』私は起きた彼に訊ねた。『向こうの世界はどうだった？』

今思えば、その答えは聞く必要もなく当然だったのかもしれない。
彼は涙塗れの、けれど晴れやかな顔で
『おはようございます。真衣さん。楽しかったですよ。』
と答えた。
私はそのコトバを聞いたとき
彼が“これが、本来の夾くん”であると確信した。
前の夾くんなど知らないのに
とにかく私はそう感じた。
『恐怖、って感情久しぶりに味わいました。結構いいものですね。』
ジェットコースターに乗ったときの感情と似ているのかな?、彼はそう揶揄した。
『願望屋さん。』
彼は、私の隣に居た願望屋、秋に訊ねた。
『貴方はいつから、ぼくの二つ目の人格――――僕の存在を気づいていたんですか?』
願望屋は微笑して答えた。
『最初からだよ。』
『そうですか。』彼も微笑んだ。『それにしても、何時からこの一連の“出来事”は仕組まれてたんです?』
『真衣を転校させたときぐらいからかな。』
『え?なにそれ。』
私は彼に訊ねた。仕組まれた?そんなの聞いてない。
『真衣には言ってなかったからね。』彼は笑う。『今更ながらいっときゃぁ良かったって思うよ。まぁ、結果的には成功したけどね。』
『え?、え・・・どういうこと?』
どうやら、私はおいてけぼりを食らってるらしい。ここで、放置プレイですか。
『君が暴走したから、結構大変だったんだよ。後始末。』
『へ?』
『君はいつから気づいてたの?、今までの出来事が全部僕こと藤沢

秋が仕組んだってこと。』
秋は尚、私を放置したまま話を続けた。
『たった、今ですよ。』彼は言った。『そこで隠れてる男を視認した瞬間です。』
『あ～、あの子か。隠れるの下手だなぁ。』秋は後ろに眼をやり、柱の陰に隠れている不器用な男の子に眼をやった。『でてきていいよ。もう、ばれちゃってるみたいだから』
赤面した少年が現れた。
よくみると、その少年は見たことのある顔だった。
『まさか、桃太が仕組みに加担してたとは思いませんでしたよ。』
『彼は少し前、君と似た理由・・・・彼は“生きた心地がしない”という理由でここを訪れていたからね。彼に君の容姿や性格は色々聞いていたから来たときは吃驚したよ。ホント。』
『まさか、夾くんが願望屋さんに来てるなんて思いもしなかったよ。クライアントってこのことだったんだね。それに、あの真衣さんが願望屋さんの知り合いだってことに凄く吃驚。』
と桃太。
『え？・・・ああ・・・秋。何で私に知らせてくれないのよ。仕組みのこととか』
桃太の突然の私への振りに私は少し戸惑った。
『だから、後悔したって言ってるでしょ？でも、まさか学校で麻呂くんを殴るとは思わなかったよ。っていうか徹の存在すっかり忘れてたし。夾くんの動機とか結構不明な点があったからさ、シナリオどおりに進まないところは結構あったよ。特に―――』
秋は続けた。
『真衣、じゃなくて徹が麻呂君たちに喧嘩売ったトコは。っていうか神楽坂で倒れた辺りから予定外。あっ、因みに麻呂君はこちらの、エキストラじゃないから。桃太くんだけだから。』
まるで、何事もなかったかのように
いままでのことが嘘だったかのように

彼は語る。
もしかしたら夾くんが出て行ったときの彼の必死に探す姿は偽りだったのかもしれない、と私は思った。
それとも、あの時だけは本当に心配していたのだろうか？
『・・・』
『まぁ、その失敗も結果的には上手く働いたけどね。麻呂くんたちとの友情は、依頼成功のための犠牲ってことで。』
いや、私が、悪いのだ。
秋は口に出さないが夾くんが麻呂くんやかけがえのない友達を失ったのも全て私が未熟だったせいだ。
成功のための犠牲なんかではなく・・・。
秋は更に続ける。
『しかし、そうはいうもののこちらの管理不行届きだったせい。麻呂君たちを失ったことは謝るよ。ごめんなさい。
でも――――こいつは攻めないでやってね。こいつはこいつなりに頑張ったんだから』
彼は私の頭を撫ぜた。
涙が私の眼から溢れそうになり必死に我慢する。
なんで。なんでよ。
なんで、貴方は私を攻めないの？
貴方が謝るの？
なんで貴方はそんなに優しく私にするの？
攻めてくれたっていいのに。怒ってくれたっていいのに・・・・
『真衣さん？』秋の言葉に聞き入り沈黙していた夾くんが私を呼ぶ声が聞こえた。『ぼくは気にしてませんから。大丈夫です。』
夾くんの言葉が、優しさが私の心に突き刺さった。
涙腺が緩み、私の眼から涙が決壊した――――。
私は未熟だった。
本当に未熟だった。
さっきそれを知ったつもりだったけど、それでも・・・

『ごべんだざい。ぎょぶぐん・・・・・・』
私は初めて彼に謝った。
彼は許してくれるといったけれど
私はとにかく彼に謝りたかった。

＊第二十五話　ごめんなさい（後書き）

もうすぐ、完結！

＊第二十六話　決意を胸に

『それでは・・・・。願望屋さん。ありがとうございました。』
あの後、秋と私にお礼を言って、夾くんは桃太くんと一緒にすぐ帰った。
その後、私は意を決して彼に、願望屋藤沢秋に私の意志を告げた――――。

＊

雪はしんしんと降る――――
まるで映画のように雪は町に降り積もり、街灯がそれらを照らす。
雪は地面を白く染め、世界を儚げに静かに染め上げる
普段は喧嘩をしている夫婦もぐれている子供も夜には家に戻り、気まずい夜を過ごす。
恋人たちは身を寄せ合い、接吻に興じ、神秘的な夜をあかす
真っ白なベールに包まれて――――
私は、外に出た。いつものようにおめかしなどしていない。もう寝る前のこと。
不意に外に出たくなったのだ。
外に出るとすぐにわたしの肩に白い結晶が降り積もった。
私は構わずそのまま歩き出し、近くの公園へと向かう。

公園には誰もいなかった。当然だろう。もう、深夜十二時を回っている。私は公園にある白いベールに覆われたブランコに腰掛けた。
不思議と寒さは感じなかった。普段は悴む手もほんわか暖かかった。
不意に空を見上げたくなった。
漆黒の闇。いつもなら見える星も見えなかった。空から流れ落ちる雪が凄く映える。
私は暫く空を見上げていた。顔に沢山の粉雪が当たったけど私は気

にしなかった。
ああ。
私は小さな声で呟く。
このままでずっといたいな・・・
空から降る雪を見てると私は儚げな気分になった。
『真衣。』
突然、後ろのほうから私を呼ぶ声がした。それは良く知る男の子の声。私は空から目を下ろし、後ろを振り向いた。
『どうしたの？こんなところで。』彼の優しい声が私の耳を包んだ。
『寒くない？』
彼は自分の着ている外套を私に被せた。
彼の匂いがした。
『ありがとう。』私は呟き、また空を見上げた。
『ねぇ』私は独り言のように空を見上げたまま彼に訊ねた。『空は世界中何処でも繋がってるんだよね？』
それはあたりまえのこと。
小学生でも知っている当たり前のこと
『そうだね。地球は丸いから』
彼はゆっくりと答えた。
小学生を諭すように。
しれっ、と。
あたりまえだろ？、いうように。
『私ね。』彼の言葉に頷き、意を決してゆっくりと私は告げる。『大学行こうと思うんだ。』
彼は何も答えなかった。私は言葉を続けた。
『“ダングレッシヴ女子短大”欧州の方の大学でね。心理学専門の大学なんだ。今回の夾くんの事件でね。私、学んだんだ。未熟だって。今まで何処か自惚れてたのがわかったの。だから、だからね。秋。私、貴方の役に立つようにもっと勉強したいの。貴方に聞き齧った中途半端な心理学。最初はそれでいいと思っていた。貴方の役

に立つのなら。貴方はいいといってくれたし、私も自惚れてこれでいいと思っていた。けれど違った。夾くんを助けることはできなかった。それどころか彼の病状を助長させてしまった。もうそんなの嫌。貴方の役に立つように貴方の隣にいれるように私はなりたいの。私を救ってくれたきみの隣に。』

『あいつには・・・・伝えたの？』彼は私に訊ねた。

『ううん。』

『伝えるの？』

『ううん。』

『そっか。』

彼は私の決意の固さが伝わったのかそれ以上何も訊ねなかった。ただ一言、

『風邪、引くなよ』

と彼は言うと、私に手に持っていた暖かい珈琲缶を渡し、公園から出て行った。

私の眼から涙が溢れ出した。

何故かわからない。無性に泣きたくなった。

嬉しいのか。悲しいのか。

どちらかわからなかったけど。

雪は静かに私の体に降り積もる。

彼の残した温もりが私の体を駆け巡り――――不思議と寒さが感じなかった。

私は再び空を見上げる。

この空が続いている限り

また、貴方に会えるだろう

この空で繋がっている限り

私と貴方は繋がっているだろう

いつか会えるのだ。だから淋しくない
秋にも。そして、夾くんにも。
私は涙を手で拭い、ゆっくりと立ち上がった。
そして、出口へ向けてゆっくりと歩き出す――――。
来るときには哀しく儚げに見えた白い世界が急に希望の兆しに見えた。
一歩。また一歩。私は進む。

翌日。昨日の雪は嘘のように空は晴れていた。雲ひとつない青空。
照りつける日差しが暖かい。絶好の門出日和だ。
私はいつもどおり、朝起きた。そして、いつもどおり顔を洗い、歯磨きをして、ご飯を食べる。いつもどおり服を着替えて、そしていつもどおり駅に向かう。
ただ違うのは行く場所だけだ。いつもなら、二つ次の駅で降り、秋の願望屋に向かうのだが、今日は外国へ出発するために“成田空港”に行かなければならなかった。

時間が過ぎるのは時が止まっているかと思うほどゆっくりだった。
一人で退屈な時間だったがしょうがない。今日出発することは誰にも伝えてないのだから。
成田空港に着き、私はダイヤを確認する。午後一時三十分発。
どうやら昨日の大雪によるダイヤの乱れはないようだ。
私はほっ、と安心するとお腹が減っていることに気づき、早めの昼食をとることにした。

＊

午後十二時五十分。
私は決意を胸にゲートへと向かう。
搭乗前の手荷物検査があるため私は早めに待合室へと向かった。

『真衣！』『真衣さん！！』
突然、二重に重なる声が私の耳に響く。
『・・・・え？』私は――――振り向く。
『秋・・・夾くん！！な、なんで？』
『いちゃ悪い？』
秋が私に言う。
『別に――――・・・悪くはないけど・・・』私は夾くんのほうを見る。いつもより彼が格好良く見える。私は不意に恥ずかしくなって一瞬、顔を背ける。
『今日はさ、夾くんの付き添いで僕は来たんだよね。』秋はシニカルに笑う。『さっ、時間ないんだから、夾くんはやく～！』
彼が目の前に来て、私は顔を上げる。

『真衣さん、好きです――――――』

彼は堂々と――――――
しれっ、と――――――
いきなり――――――
私の顔を見て。
そう言った。
まだ、心の準備ができてない私に。
動悸が高く、私の体中に響いた。
『１５７便、搭乗開始をお知らせします。』
『行かなきゃ――――――！！！』
私は、夾くんに向けて手を伸ばした。
彼にまた逢いたいと思った。
彼とまた話したいと思った。
今度は、恋人として
今度は、彼の人生を共にする伴侶として。

――――私は優しく彼にキスをする。
『私も、君のこと大好きだよ――――』
Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ
Ｍｅｅｔ　ｓｏｍｅｔｉｍｅ　ａｇａｉｎ・・・・
バイバイ。秋、夾くん

ありがとう――――

溢れ出そうなん涙を堪え私は一歩踏み出す。
それが、吉と出るか凶とでるか私にはわからないけれど。
進まなければ何も始まらない気がするから。

＊エピローグ　Ｄｅａｒ　Ｍａｉ――――新堂夾の手記より（前書き）

君に逢えたことに感謝しよう――――

＊エピローグ　Dear Mai――――新堂夾の手記より

三ヶ月後。
『新堂夾くんへ
ご無沙汰してます。
私のこと覚えている？きみの年上の彼女だよ！
元気にしてる？
また、変な夢に悩まされたりしてないよね？
私はダングレッシヴ女子短大での生活に慣れて、元気にしてるから安心してね。』
俺はゆっくりと、その手紙を手にとって、宛名をもう一度確認した。
【七瀬真衣】
ぼくは微かに微笑んだ。

＊

『大好きな真衣さんへ。
こんにちは。
ご無沙汰してます。
俺は中学卒業後、願望屋で働いています。
本当は高校進学という道もあったんですが、あれから中学に通いにくく、結局働くことにしました。
でも悔いはありません。将来的に真衣さんと働けると思うし、願望屋は結構楽しい職場だからです。
でも、困ったこともあります。何故か“僕”とキャラが被るという師匠（マスター）の理不尽な理由で（あっ、因みに師匠とは願望屋藤沢秋師匠のことです。これも義務付けらされました。）一人称を俺に強制させられました。いや、ホント師匠は理不尽です。よく真衣さんは今まで堪えれましたね（笑）
でも、意外といい一面もあります。

この間俺が雑用を任されて掃除してたんですけど、掃除終わった後事務所に戻ると彼黙ってお茶出してくれてたんです。
結構ベタで普通の行為ですが師匠がやると何故か途轍もなく凄いことに見えてしまうんですよね。
そうそう、昨日は面白いことを聞きました。
この願望屋は実は秋が譲り受けたものだと教えてくれました。
ご存知でしたか？
この先はこの便箋には書ききれないので、帰ってきたら話します。
まぁ、詳しいことは俺も聞けず仕舞いなんですけどね。真衣さんが帰ってくるまでに聞いておきます
楽しみにしてくださいね。
桃太もよく遊びに来ます。
最も彼は真衣さんが来るのを心待ちにしているようですけど（笑）
あっ、ぼくと秋の願望屋前で撮った写真を同封しておきます。
はやく勉強終えて帰ってきてくださいね。
また逢える日を楽しみにしています。　　夾より』
ぼくは便箋を閉じ、願望屋の窓から空を見上げた。

この空が続いている限り
また、貴方に会えるだろう
この空で繋がっている限り
ぼくと君は繋がっているだろう

いつか会えるのだ――――

＊エピローグ　Ｄｅａｒ　Ｍａｉ――――新堂夾の手記より（後書き）

～長い間ご愛読ありがとうゴザイマシタ。次回作も宜しくお願いいたします～

＊あとがき　～漸く完結～

どうも、蓮宮です・・・・
永らく永らくお待たせ致しました。
受験期、プライベートでのトラブル等重なり長い間スランプ状態でしたが、高校に入って
いろんな人と出逢い、考えも変わりました。
格好つけて、上手い文章書こうとして回りくどいことして下手になってスランプに陥る。
もうそんな自分とはおさらばです。
いつか、小説家になりたい――――
小さい頃から小説家を志してきたプライド。
そんな腐ったもんが邪魔をして、今までろくに考えもせず小説を書き、上手くかけなければ次の話に移る、を繰り返してきました。
いつか、言葉が天から落ちてくるだろう。
自分は特別なものなのだから
すいません。馬鹿でした。
文章を書く練習もろくにせず、世界一の物語をかこうなんて馬が良すぎますよね。
でも――――
もう、大丈夫です。
幼稚で、稚拙で、滑稽で。
醜い、痛々しい文章かもしれません。
皆さん、どんどん僕に罵声を浴びせてください。（たまにはアメも下さいね）
ぼくは――――
もう、挫けません。
どんなけ下手でも醜くても
そんな自分を受け入れようかと思います。

本当はまだ完結させる気はありませんでしたが、もうそろそろ前に進んでみようかと思います。
これにて、～願望屋～は終幕です。
この作品はぼくに色々なものを与えてくれました。
この小説を書いたのが１４歳という感受性が強いころだったからかもしれません。
また、この作品は僕と大事なヒトを結ぶ架け橋でもありました・・・・・・

この作品を通してぼくは成長できたと思います。
読んでくださった皆様、啓至さん、どうもありがとうございました。
この後が気になった方は啓至さんの小説、～願望屋～人魚姫の歌声を読んで下さいね。
それでは、マタアイマショウ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4460c/

～願望屋～

2010年10月9日19時52分発行